

表紙, 目次, 抄録, 漫録, 通信, 雑報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38311

大正二年三月一日發行

十全會雜誌

卷八十第
號三第
(號六十八第)

全澤醫齒學專門學校十全會

十全會雜誌 (第十卷第三號) 目次

○原著及實驗

●日本人頭蓋計測。(第一報)

●紅肢痛ノ一例。

石川縣江沼病院醫員

中野鑄太郎
岡田申吉

○抄錄

●下平博士學位論文審査ノ要旨。

○漫錄

●涕泣の研究。

●彌次錄。

福田美明

楠田利一郎

○通信

●十全會新潟支部通信。●小島佐藏氏通信。●杉山貞二氏通信。●鈴

木正孝氏通信。●寺尾敏三氏通信。●正木芳隆氏通信。●宇佐美保久氏通信。●本正生氏通信。

○校內雜報

●陸軍衛生部依託生。

○人事

●須藤靈三氏。●石坂伸吉氏。●河野勇氏。●武長壽雄氏。●鈴木正孝氏。●太田尙男氏。●辻本辰之助氏。●瓜生尹重氏。●杉山貞二氏。●加瀬順之助氏。●田中信一氏。●新八郎。●田村實氏。●小西眞清氏。●豐田銳氏。●植西武彦氏。●轉居會員。●居所不明會員。

○會告

●校外特別會員會費調書。

診斷 四肢末端對側的ニ來レル紅肢痛

合併症 梅毒、癩病（ヒステリー、神經衰弱）

原因 素因 血族結婚

誘因 梅毒、癩病

療法 入院當日撒曹、ヒリン、沃剝等ノ内服、局所ニハ「コロ、フオル

△、カンフル丁」等分ノモノ塗布十二月廿三日ヨリ驅梅療法トシテ隔日ニ

「アヅロール」一〇、〇注射ヲナセリ外陰部、肛圍大腿内側ノ丘疹ニハ甘芥

澀等分散布、驅虫ハ後ニセリ

入院安靜療法ノ爲メカ廿三日ヨリ四肢ヲ水中ニ浸サズナゲ出シノ狀トナリ

塗布藥ヲ用ヒテ稍輕快セリト云フ

「アヅロール」ハ隔日之ヲ臀筋ニ注射シ陰部ノ發疹益々消散スルニ至ル、廿

八日ニ至リ又々疼痛甚シク、不安、睡眠セズ、時々號叫シ本年一月三日未

治退院スルニ至ル

依是見是本患者ハ紅肢痛ナルコト明白ナルモ其原因ノ梅毒ニ因スルヤ果タ

血族結婚ニ關スルヤ闡明スルコトヲ得ザルモ此ノ兩者ニ存スルコト疑ヲ容

レザルベシ、又「アタキシ」アリ膝蓋髓反射頗ル亢進スルモ「バビンスキ

」ナク足反射アルニヨリ「アタキシ」ハ足蹠疼痛ノ爲メカ、サレバ側索

ノ犯サレタルモノニ非ズ故ニ從來稱フルガ如ク末梢神經ノ犯サレタルモノ

ナラン

附記 患者ノ言ニヨレバ同村ニテ十四歳ノ男兒爐邊ニアリテ足ヲ暖メ灼

熱感ノ爲メカ轉々スト或ハ本患者ト同ジキモノナラン。

孤 録

●下平博士學位論文審査ノ要旨

學 位 記

石川縣平民

從五位勳五等 下 平 用 彩

右論文ヲ提出シテ學位ヲ請求シ東京帝國大學醫科大學教授會ニ於テ其大學院ニ入り定規ノ試験ヲ經タル者ト同等以上ノ學力アリト認メタリ仍テ明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二號ニ依リ茲ニ醫學博士ノ學位ヲ授ク

論文審査ノ要旨

ビール氏鬱血療法ノ效能ニ就テノ實驗的補遺(獨文)

當初專ラ骨及關節結核症ニ有效ナリトシテ使用セラレタル所謂ビール氏鬱血療法ナル者ノ近時ニ至リ亦諸種ノ急性炎症疾患ニ應用セラレテ奏效顯著ナル者アルコトハ今ヤ普ク臨床家ノ是認スル所ナルモ獨リ其效能ノ本體ニ至リテハ從來諸家ノ説ク所區々トシテ未タ歸着スル所ナシ本業蹟ハ曩ニ著者カ瑞西國「ベルン」大學在學中衛生及細菌學教室ニ於テ教授ワキルヘルム、コレル氏ノ許ニテ研鑽シタル者ニシテ論文ハ緒論ト(一)鬱血療法ニ對スル臨床的觀ノ梗概、(二)鬱血療法ノ效能ニ關スル從來ノ實驗及學理的說明、(三)自家ノ實驗及(四)終末觀察及總括ノ四項ヨリ成リ而シテ自家ノ實驗ハ更ニ(一)「オプソニン」ノ試験(二)補體(コンプレメント)ノ試験(三)補體結合物質ノ試験(四)「アゲルチニン」ノ試験及(五)殺菌方ノ試験ノ五項

ヨリ成リ特ニ學理的説明ノ條下ニ於テハ普ク諸家ノ説ヲ列舉シ自家ノ實驗ニ就テハ數多ノ動物試驗ニ徴シテ之ヲ詳論シ通編敘述スル所百有七頁ニ互リ之ニ二百二十二ノ「リテラツール」ヲ引用シビール氏鬱血療法ノ救能ニ就テ頗ル精細詳密ニ論述セルモノナルカ今其内第三項自家研究ニ關スル成績ノ中ヨリ大意ヲ摘録スレハ左ノ如シ

著者ハ「自家ノ實驗」ナル條項ニ於テ冒頭ニ鬱血療法ノ效能ノ本態ニ對スル學理的説明ハ從來諸説紛々一致スル所ナキヲ以テ動物試驗ノ成績ハ擧ケテ以テ直ニ之ヲ人體ニ應用スルコト能ハサルニセヨ尙少クトモ其一部ノ解釋ヲ獲ヘシトナシ尋常動物及傳染セシメタル動物ニ就テ鬱血性浮腫液及血清中ニ於ケル「オプソニン」「コンプレメント」「補體」補體結合物質及「アグルチニン」ノ關係ヲ研究シ且浮腫液及血清ノ殺菌力ノ比較検査セリ而テ著者ハ此動物試驗ニ於テ専ラ家兎ヲ使用シ其耳及後脚ニ鬱血性浮腫ヲ起サシメタルカ動物ニ正當ナル浮腫ヲ起サシムルハ必シモ容易ナラサルコトヲ附言シ且之ニ施シタル鬱血ノ方法ヲ詳述シタル後前記諸試驗ノ方法及成績ヲ精細ニ論述セリ

(1)「オプソニン」ノ試驗 此項ニ於テハ著者ハ先ツ輒近ニ於ケル免疫學說ノ梗概ヲ論シテライト氏ノ「オプソニン」說及ノイフェルド氏ノ「バクテリアオトロビン」說ニ及ヒ次テ「オプソニン」ノ發見セラレタル來歴ヨリ其本性及試驗法ヲ論述シ而「オプソニン」ハ畜ニ人體ノ血清中ノミナラス亦其滲出物皮膚水泡液中加之ナラス乳汁中ニモ存スルコトハ既ニライト及ツクラス氏ノ證明セル所ニシテクルーベル及ニ木氏ニ據レハ「モルモツト」及家兎ノ血清ハ種々ナル細菌(葡萄狀球菌、連鎖狀球菌、肺炎球菌、大腸菌、靈菌、枯草菌、變形菌等)ニ對シテ強ク「オプソニン」ノ作用ヲ呈スルコトヲ說キ又蛙、魚ノ如キ冷血動物ノ血清中ニモ「オプソニン」ノ含有セラレ、コトヲ述ヘ上述ノ如ク家兎血清中ニ「オプソニン」ノ存在スルコトハ既定ノ事實ナルモ著者ハ先本試驗ニ於テビール氏ノ鬱血法ニ由

リテ得タル健康ナル家兎ノ浮腫液中ニハ同動物ノ血清中ニ於ケル同量ノ「オプソニン」ヲ含有スルヤ否ヤヲ檢シ若シ之ヲ證明スルコトヲ得ハ次テ健康動物ト傳染セシメタル動物ノ浮腫液中ニ於ケル「オプソニン」ノ含有量ヲ比較研究セントセリ

著者ノ「オプソニン」檢定法ハ主トシテライト氏ノ法ニ準據シタル者ニシテ之ニハ(1)洗ヒタル「ロイコチーテン」(2)細菌乳劑及(3)血清若クハ浮腫液ヲ要スルカ著者ハ「ロイコチーテン」ハ常ニ健康ナル家兎ノ血液ヨリ採取シ細菌乳劑トシテハ動物ノ傳染ニ使用シタルト同一ノ葡萄狀球菌及連鎖狀球菌ヲ使用シ是等ノ三物質ハ各一分ノ比例ニテ混合シテ試驗ニ供シ染色ニハ主トシテ「ボーラキスメチーレンブラウ」及「マイ、グルー、ンワルド」氏ノ「エカジンメチーレンブラウ」ヲ使用セリ

抑ビール氏ノ鬱血療法ニ際シ喰菌作用ヲ從來諸家ノ唱ヘタルカ如ク少カラサル關係アル者ナルヘク既ニフロヒシエラ、フォンクラツフ氏等ノ如キハ既ニ此方面ニ向テ研究ノ歩ヲ進メタルモ喰菌現象ノ果シテ「オプソニン」ノ存在ニ基因スルヤ否ニ就テハ未タ論及セサル所ナルヲ以テ著者ハ是等ノ關係ヨリシテ本試驗ヲ企テタルモノナルカ著者ハ之ニ多數ノ動物ニ使用シ先第一ニ健康ナル家兎ノ浮腫液中ニハ實際「オプソニン」ヲ含有スルコトヲ證明シ次テ此浮腫液中ノ「オプソニン」ハ同一動物ノ血清中ノ「オプソニン」ト殆ト同量ナルカ或ハ間ク之ヨリ稍多量ナルコト有ルヲ發見セル而テ著者ハ此検査ニ於テ常ニ〇、八五%食鹽溶液ヲ用ヒテ對照検査ヲ行ヒタルカ該查ニ於テハ喰菌數ハ常ニ甚タ少數ナルカ或ハ殆ト零ニ均シキコトヲ確定シ且此所謂「特發喰菌作用」ニ就テモ論及スル所アリ次ニ第二ノ局所ノ傳染ヲ起サシメタル動物ノ浮腫液中ニ存スル「オプソニン」ハ同一動物ノ血清中ノ「オプソニン」ニ對シテ分量の如何ナル關係ヲ有スルヤノ問題ニ就テハ著者ハ浮腫液ヲ以テセル試驗ニ於テハ血清ヲ以テセル者ヨリモ喰菌數ハ殆ト常ニ稍々多數ナルコト換言スレハ浮腫液

中「オプソニン」ハ血清ヨリモ稍々多量ナルコトヲ發見セリ著者ノ考案ニ據ルハ此成績ハ一見葡萄球菌若クハ結核菌ノ傳染ヲ有スル人ノ膿瘍液若クハ腹腔滲出液中「オプソニン」量ハ同一患者ノ血清中「オプソニン」ヨリ少量ナリト云ヘルライト氏ノ説ニ反スル者ノ如クナルモ著者ノ試驗ニ於テハ著明ナル炎症性腫脹ヲ呈スル局所ニ鬱血法ヲ施シテ得タル浮腫液ヲ用ヒタルモノニシテライト氏ノ如ク膿瘍液ヲ用ヒタルニ非ス又ライト氏自己モ結核症患者ノ腹腔滲出液中ニハ多量「オプソニン」ヲ含有スルコトヲ證明シタルコトアレハ著者ノ成績ハ敢テライト氏ノ説ト矛盾スル所アル可シト論セリ

著者ハ此試驗ニ於テ家兎ノ後脚ニ急性蜂窠織性炎症ヲ起サシメント目的ニテ足背或ハ下腿ノ皮膚下又ハ稍々深部ニ葡萄球菌及連鎖球菌ノ混合物ヲ注射シタルニ多クノ場合ニ於テハ大抵一日乃至三日ノ間ニ局所ニ多少著明ナル炎症性腫脹ヲ呈スルヲ認メタルニ純粹ナル葡萄球菌ヲ以テシテハ炎症反應一般ニ著明ナラス數日ノ後注射局部ニ小ナル膿瘍ヲ生スルコト稀ナラサリシト云ヘリ

著者ハ更ニ以上述タル健康ナル動物ト傳染セシメタル動物トニ於ケル試驗成績ヲ比較スルニ喰菌數ニハ格段ナル差異ナキコトヲ述ヘ且「オプソニン」ノ特異性其他「オプソニン」ノ加熱ニ對スル抵抗力及血清ノ稀釋ト喰菌作用トノ關係ヲ概論シ最後ニ本試驗ノ成績ヲ左ノ如ク總括セリ曰「余ハ家兎ニ就テ葡萄球菌及連鎖球菌ヲ以テナシタル本試驗ニ於テビール氏鬱血法ノ可良ナル效用ヲ説明スルニ「オプソニン」及「バクテリオトロピン」ノ增量ヲ以テスルコト能ハス是其增量ハ微小ニシテ而モ何レノ動物ニモ之ヲ證明スルコト能ハザルハナク唯是等ノ物質ハ鬱血ニ際シテ共同シテ作用シテ治療ヲ完成スル諸他要素ノ一ト見做スヘキノミ」ト

(II)「コンプレメント」(補體)ノ試驗 著者ハ此項ニ於テハ先ツブネル氏

ニヨリテ「アレキシシン」ト命名サレタル血清中ノ殺菌性物質ハ「エーリヒ氏」ノ所謂「コンプレメント」(補體)ト同一ナルコトヨリ細胞ヲ含有セサル體液中ニ於テ細菌ノ死滅スルハ殊ニ免疫血清中ニ在リテハ特異性ニ作用スル所ノ不變ノ免疫體ト「コンプレメント」トノ其働作用ニ因ルコトヲ概論シ又此「コンプレメント」ハ尋常及免疫血清中ニ存在スルモ其性甚タ變化シ易ク且其免疫法ニ由リテ增量スルコトナキコト等ヲ說キタル後此試驗ノ目的タル尋常及傳染セシメタル動物ノ浮腫液及血清中ニ含有セラルル「コンプレメント」ノ關係ヲ檢知セントスルニ在ルコトヲ述ヘタリ是著者ハ從來諸家ノ研究ニ據ルハ鬱血セシメタル體部ニ於テハ常ニ許多ノ「ロイコチーテン」ノ集積スルヲ見ルノミナラス是等ノ「ロイコチーテン」ハ亦多ク此部ニ於テ滅亡スル者ニシテ且「ロイコチーテン」ハ「コンプレメント」ノ產生者タルコトハ既ニ人ノ知ル所ナルヲ以テ鬱血ノ爲メ浮腫液中ニハ「コンプレメント」ノ增量スルコト有ランコトヲ想定シタルニ因ルナリ

著者ハ此試驗ニモ常ニ家兎ヲ使用シタリシカ検査ニ先テ豫羊血球ヲ用ヒテ法ノ如ク家兎ヲ免疫シテ血球溶解性血清ヲ製シ該血清ハ〇、〇七〇、〇六〇、〇五〇、〇四〇、〇三ノ稀釋度ニ於テ浮腫液及血清ハ〇、二、〇、〇、〇五、〇、〇一、〇、〇〇五ノ稀釋ニ於テ混合シ血球溶解現象ノ程度ニ由リテ浮腫液及血清中ノ「コンプレメント」ノ量ヲ檢定シタルニ先ツ浮腫液中ノ「コンプレメント」ハ同一動物ノ血清中ノ「コンプレメント」ト殆ト同量ナルカ或ハ時トシテハ僅カニ之ヨリ多量ナルコトアルヲ發見シ且浮腫液中ノ「コンプレメント」ノ少量ナル場合ニハ血清中ノ「コンプレメント」モ亦之ニ應ジテ少量ナルコトヲ證明セリ而シテ著者ハ之ニ由リテ血清中ノ「コンプレメント」ハ殆ト同様ノ比例ニテ浮腫液中ニ移行スルコトヲ檢知セリ

次テ著者ハ「オプソニン」試驗ニ用ヒタルト同一ノ葡萄球菌及連鎖球菌ヲ

動物ノ後脚ニ注射シテ之ニ炎症ヲ起サシメタル後鬱血法ニ由リ之ヲ浮腫セシメ浮腫液ヲ採ルト同時ニ血清ヲ採リ其中ノ「コンプレメント」量ヲ比較検査シタルニ此浮腫液中ノ「コンプレメント」ハ血清中ノ「コンプレメント」ニ比シテ常ニ著シク減少セルコトヲ發見セリ而著者ハ此事實ヲ以テ鬱血療法ノ治效ニ重要ナル關係アル者ナラントシ先ツ家兔兩耳ニ鬱血性浮腫ヲ起サシメタル後一方ノ浮腫セル部ニ「白金耳」ノ「コレラ」培養ヲ注射シ五時間ノ後兩耳ヨリ浮腫液ヲ採リ検査シタルニ此場合ニ於テモ傳染部ノ浮腫液中ニハ「コンプレメント」ノ含量著シク減少セルコトヲ見タリ

是ニ於テ著者ハ更ニ一方ノ耳ニ鬱血性浮腫ヲ起サシメ此部ニ多量ノ「コレラ」培養ヲ注射シタル後五時間乃至二十四時間ヲ經テ浮腫液及血清ヲ採リ其中ノ「コンプレメント」量ヲ比較シタルニ血清中ノ「コンプレメント」量ハ變化スルコトナキモ傳染部ノ浮腫液中ニハ常ニ「コンプレメント」ノ著シク減量スルヲ認メタリ著者ハ上記ノ試験ニ由リ家兔ノ發炎セル部或ハ傳染誘起物ヲ包藏セル部ノ浮腫液中ノ「コンプレメント」含量ハ同動物ノ血清中ノ「コンプレメント」トニ比シテ著シク減少スルコトヲ發見シタリシカ此現象ノ鬱血療法ニ對スル關係ニ就テハ本項ニ於テハ未タ論及セザリキ

(III) 補體結合物質ノ試驗 著者ハ先ツボルデー及ジャングー氏ノ補體結合法ト當ニ免疫學上ノミナラス亦實地醫學上肝要ナル者ナルヨリ説キ起シテ該法ノ原理ニ及ホシ次テ或傳染ノ爲メ生體內ニ生シタル一定ノ補體結合物質ハ恐ク鬱血性浮腫液ニ移行シテ補體(コンプレメント)ト結合スル者ナラント説キ且若シ此抗體ニシテ果シテ生體內ニ生シ浮腫液中ニ輸入セラル、者トスル時ハ恐ク此部ニ多量ニ存在スルコト無キヤト説ケリ是著者ノ前段掲ケタル試驗ニ由レハ鬱血性充血ニ際シテハ「オプソニン」ハ浮腫液中ニ屢々稍々多量ニ發見セラレ又傳染セシメサル動物ニ在

リテハ「コンプレメント」モ亦屢々多量ニ證明セラレタルハナリ而テ著者ハ此觀察ヨリシテ免疫セシメタル動物ニ就テ鬱血性浮腫液ト同動物ノ血清中トニ於ケル補體結合物質ノ量ヲ比較検査セシムコトヲ企テタルナリ著者ハ先ツ茲ニ補體結合試驗ノ方法ヲ詳細ニ説明シタリシカ著者ノ試験ニ於テハ豫メ免疫血清ヲ得ンカ爲メ一時間攝氏六十度ニ加熱シタル「コレラ」培養或ハ「チアス」培養ヲ家兔ノ靜脈ニ注射シ最後ノ注射後十日ヲ經テ該動物ノ耳ニ鬱血性浮腫ヲ起サシメ斯クテ此浮腫液ト共ニ同時ニ其血清ヲ採取セリ又免疫元トシテハ二十四時間培養シタル「コレラ」菌或ハ「チアス」菌ヲ使用シタリシカ其試驗成績ニ由レハ免疫シタル動物ノ浮腫液竝ニ其血清中ニハ何レモボルデー、ジャングー氏法ニ由リ補體結合物質ヲ證明スルコトヲ得タルモ此物質ハ浮腫液中ニ於テハ血清中ニ於ケルヨリモ少量ナルコトヲ發見シ而此差異ハ殊ニ「コレラ」免疫動物ニ於テ最モ著明ナリト云ヘリ

次テ著者ハ此試験ニ續テ尙「浮腫液中ニ於ケル細菌ノ運命」ヲ檢知セント欲シ先ツ家兔ノ耳ニ鬱血性浮腫ヲ起サシメタル後該部ニ少量或ハ大量ノ生活セル「コレラ」培養ヲ注射シ一定時ノ後浮腫液ト同時ニ血清ヲ採リ之ヲ加熱シテ非能動性トナシ而テ此兩液ヲ免疫元ニ供シ抗體トシテハ「コレラ」免疫血清ヲ用ヒテ補體結合試驗ヲ施シタルニ何レノ試験ニ於テモ浮腫液及血清中ニ補體結合物質ヲ證明スルコト能ハザリキ此他著者ハ最後ニ鬱血性浮腫ヲ起サシメタル家兔ノ耳ニ生活セル「コレラ」培養ヲ注射シタル後二十四時間ヲ經テ該耳ヲ切除シ其中ノ浮腫液ヲ全ク驅除シタル後ブーネル氏壓搾器ヲ用ヒテ之ヨリ壓搾液ヲ製シ之ヲ遠心沈澱セシメ得タル透明ナル液ヲ非能動性トナシ之ヲ免疫元トナシテ補體結合試驗ヲ行ヒタルニ只壓搾液ノ多量ナル硝子管内ニ於テノミ僅ニ溶解制止ヲ認メタリト云ヘリ

著者ハ上記ノ試験ニ由リ浮腫液中ニ溶解セラレタル細菌性「コレラ」物質

ハホルデー、ジャングー氏ノ補體結合試驗ニヨリテ確實ニ證明スルコト能ハストシ斷案ヲ下シテ曰ク「鬱血部内ニ於テハ確カニ細菌ノ増殖ヲ來スコト無ク反テ細菌ハ傳染部ニ於テ滅亡ス但シ此細菌ヨリ生シタル溶解セル物質ハ明カニ甚タ速カニ吸收セラル、カ或ハ鬱血浮腫液中ニ於テ全然破壊セラル、者ナラム」ト

(IV)「アグルチニン」(凝集素)ノ試驗 著者ハ「アグルチニン」ハ生物ノ傳染ニ對スル特異ナル反應ノ產物中有要ナラサル位置ヲ占ムル者ニシテ免疫血清中ニ此物質ノ發現スルハ只免疫ニ屢々隨伴スル一現象ニ過キサルコト等ヲ論シビール氏鬱血療法ニ於テモ凝集作用ハ毫無價値無キモノナラムモ著者ハ只免疫シタル動物ニ就テ鬱血性浮腫液及血清中ニ於ケル「アグルチニン」ノ關係ヲ検査スルハ亦全ク興味ナキニ非スト思考シ此試驗ヲ施シタルナリ

著者ハ此試驗ニ先チ八日毎ニ各一、二及三百金耳ノ殺菌シタル「コレラ」或ハ「チフス」培養チ家兔ノ靜脈内ニ注射シ最後ノ注射後十四日ヲ經テ鬱血法ヲ施シテ得タル浮腫液ト血液トナ二十倍ヨリ二万倍迄稀釋シ法ノ如ク凝集反應ヲ検査シタルニ先ツ浮腫液ノ凝集「チーテル」ハ血清ニ於ケルヨリモ遙カニ低キコトヲ發見シ又動物ハ何レモ豫メ同量ノ細菌ヲ以テ處置セラレタルニ拘ラス「チフス」動物ハ「コレラ」動物ヨリモ遙カニ多量ノ「アグルチニン」ヲ有スルコトヲ檢知セリ著者ハ更ニ又免疫セサル動物ニ就テ此試驗ヲ行ヒタルニ血清及浮腫液中ニハ何レモ「アグルチニン」ヲ證明セザリシト云フ

(V)殺菌力ノ試驗 著者ハ血清及體液ノ有スル殺菌性實ハ諸種ノ細菌ニ對シテ皆一樣ナラス且其殺菌性作用ハ細菌ノ數量ニ關係アル等ノコトヨリハンブルゲル、ブネル、ネエツチエル、ラグエウル、ブオン、バウムガルトン、アキサミット、フオングラッブ等諸氏ノ鬱血性浮腫液ノ殺菌力ニ關スル諸說ヲ概論シ是等ノ諸說ハ區々未タ歸著スル無キヲ以テ

著者ハ更ニ此問題ヲ研究スルモ亦興味アルコト、セリ

著者ハ此試驗ニ於テ人體ノ急性乳腺炎ヨリ培養シ得タル葡萄狀球菌ヲ使用シタリシカ先ツ家兔ノ耳ニ鬱血性浮腫ヲ起サシメ嚴密ナル防腐法ノ下ニ浮腫液及血清ヲ採取シ二十四時間培養シタル該菌一白金耳宛ヲ取リテ之ヲ各一立方仙迷ノ浮腫液及血清ニ混和シ更ニ此兩液ヲ以テ十倍、百倍及千倍ノ稀釋混和液ヲ作りテ孵卵器内ニ貯ヘ一定時間ヲ隔テ、各液ヨリ其一分ヲ寒天平面培養基ニ移植シ翌日細菌「コロニー」ノ數ヲ検査セリ此試驗ノ成績ニ據レハ浮腫液ハ試験管内ニ於テハ可ナリ強度ノ殺菌力ヲ有スルモ而モ健康動物ニ在リテハ浮腫液ノ殺菌力ハ同動物ノ血清ノ殺菌力ニ及ハサルコトヲ發見セリ

次ニ著者ハ同一動物ニ就テ傳染セシメタル後脚ト傳染セシメサル後脚トニ鬱血性浮腫ヲ起サシメ兩側ヨリ取りタル浮腫液ノ殺菌力ヲ比較檢定セント欲シ先ツ家兔ノ後脚ノ一方ニ葡萄狀球菌ヲ注射シテ著明ナル炎症ノ發起スルヲ俟チ次テ兩脚ニ鬱血法ヲ施シテ腫液ヲ取り前記ノ試驗ヲ施シタルニ炎症浮腫液ハ傳染セシメサル脚ヨリ取りタル浮腫液ヨリモ殺菌力ニ乏シキコトヲ發見セリ

是ニ於テ著者ハ試驗管内ニ於ケル炎症性浮腫液ノ殺菌力僅少ナルハ恐ク其「コンプレメント」ヲ含有スルノ微量ナルニ因ル者ナラントセリ此事實タル著者ノ既ニ證明セルカ如ク傳染管内ノ浮腫液中ニハ「コンプレメント」ノ量著シテ減少スト云ヘル試驗成績ト一致スル者ニシテ著者ノ觀察ニ由レハ試験管内ニ於テハ殺菌力ニ乏シキ滲漏液モ動物體内ニ在リテハ其作用ヲ遲フスルナラム何トナレハ體内ニ於テハ絶エス「ロイコチーテ」ノ存在スルアリテ直接ニ傳染部ニ向テ誘引セラレ其分解スルヤ人ノ知ルカ如ク「コンプレメント」ヲ供給スル者ナレハナリト

著者ハ最後ニ終末觀察及總括ノ項ニ於テ述テ曰ク現今多數ノ臨床家ハビール氏ノ鬱血療法ハ假令少數ノ例外アルモ炎症殊ニ急性炎症ニ對シテ

ハ皆其有效ナル療法タルヲ認メタリ只時ニ不良ナル結果ヲ見ルコトアルハ一部ハ其技術ノ不完全ナルニ歸スヘキ者ナラム吾人ハ現今行ハル、鬱血療法ノ技術ヲ以テ未タ完全ナル者ト思考スルコト能ハス尙將來臨床の經驗ヨリ該法ニ改善ヲ加ヘ適症ヲ充分ニ確認シ以テ良好ナル結果ヲ獲ンコトヲ期待スヘシトナシ只實驗室内ニ於テ得タル經驗ヲ以テ直ニ之ヲ正當ニ臨床上ニ應用スルコトノ困難ナルト及鬱血性充血ノ作用ノ甚タ複雑ニシテ尙全ク明カニ解釋スルコト能ハサル者アルトニ由リ尙學理上學者ノ意見ヲ異ニスル者アルヲ云ヘリ

斯クテ著者ハ多數ノ家兎ニ就テ爲シタル實驗ヲ基礎トシ鬱血療法ノ效能ノ本態ニ就テ左ノ結論ヲ擧グ

(一)「ピール氏鬱血療法ニ際シ恐ク「オプソニン」及「バグテリオトロピン」ノ扶助ニ由リ強盛トナル可キ喰菌作用ハ一定ノ作用ヲ營ム者ナラム但該法ノ有效作用ヲ喰菌作用又ハ「オプソニン」若クハ「バグテリオトロピン」ノ増量ヲ以テ説明スルコト能ハス

(二)「コンプレメント」或ハ「アレキシン」ハ尋常家兎ノ浮腫液及血清中ニハ殆ント同量ニ存スルニ家兎ノ傳染セシメタル局所ノ浮腫液中ニハ其含有甚タ減少ス

(三)補體結合物質ハ鬱血ニ際シ鬱血局部ノ浮腫液中ニハ増量スルヲ認メス

(四)鬱血局部ニ於テハ毫毛細菌ノ増殖ヲ認メサルノミナラス寧ロ其滅亡スルヲ認ム而テ細菌ヨリ産出スル溶解性物質ハ甚タ速カニ吸收セラル、カ或ハ浮腫液中ニ於テ破壊セラル、ヤ明カナリ

(五)特量性免疫凝集素ハ亦鬱血ニ際シテ只少量ニ浮腫液中ニ分與セラル

(六)尋常家兎ノ鬱血局部ヨリ得タル浮腫液ハ試験管内ニ於テハ該動物ノ血清ト殆ト同一ノ殺菌力ヲ有ス

(七)傳染セシメタル體部ニ體血ヲ施シテ得タル浮腫液ハ同動物ノ血清及尋常家兎ノ鬱血液ニ比較シテ殺菌力著シク減少ス

(八)家兎ニ就テナシタル是等ノ試験及觀察ヲ以テ人ニ於ケル種々ナル自然ノ傳染ニ對スル「ピール氏鬱血性充血」ノ效能ヲ説明セントスルニハ固ヨリ大ナル謹慎ヲ要スレトモ唯之ヨリシテ一事ノ推斷ヲ下ス可キ者アリ即生物ノ病毒ニ感染スルヤ其一般及局所反應トシテ發現スル所ノ多クノ機能ノ一箇ノ強盛若クハ多クノ物質ノ一箇ノ増加ヲ以テ該法ニ於ケル效能ノ全般ヲ説明スルコト能ハス喰菌作用ノ増盛及「ロイコチーテン」ノ破壊ノ増加及恐ク又鬱血液ノ殺菌性抗毒性及「オプソニン」作用ノ増強ノ外ニ亦吾人ノ前段ニ述ヘタル諸般事項ノ共働作用ヲモ顧慮セサル可ラス蓋シ定量的ニハ其僅微ニシテ殆ト證明スルコト能ハサルカ如キ機能ノ増進ト雖モ其共同シテ作用スルヤ亦鬱血ノ治效ヲ奏スルモノナリ是故ニ斯クノ如キ複雑ナル關係アルコトヲ諒知スル時ハ何カ故ニ鬱血法ハ斯ク外觀的ニハ全ク同一ノ状態ニアリ又一見全ク同一ノ要約ノ下ニアリナカラ或時ハ有效ニシテ或時ハ無效ナルノ理ヲ最も能ク了解スルヲ得ヘシ

甲 狀腺ノ結核症傳染ニ關スル實驗的研究(獨文)

著者ハ先ツ甲狀腺ノ結核菌ニ對スル抵抗力竝ニ該臟器結核症ノ病理的變化ヲ「リテラツール」ニ徴シテ詳述シタル後甲狀腺ハ屢々結核症ニ侵サル、他臟器ニ比シテ結核症傳染ニ對シ抵抗力ヲ有スルヤ否ヤヲ決定センカ爲メ此研究ヲ企テタル旨ニ敘セリ試驗動物トシテハ家兎ヲ使用シ接種材料トシテハ人結核菌及牛結核菌ノ培養ヲ用ヒ尙甲狀腺ノ外對照試驗トシテ脾臟腎臟及睪丸ニ是等ノ結核菌培養傳染セシメタリ著者ハ百四十四頭ノ家兎ニ就テ是等ノ試験ヲ行ヒタルカ其成績ハ詳細ナル表ニ示シテ之ヲ列擧セリ

該試驗ノ成績ニ據レバ家兎ノ甲狀腺ニ大量ノ結核菌ヲ注射スル時ハ腺ハ強ク結核ニ感染シ注射ヲ受ケタル腺葉ハ四十日乃至四十七日間ニ殆ント全部或ハ全部乾酪變性ニ陥ル但シ茲ニ注意スヘキハ注射セラレタル腺葉ハ上述ノ如ク高度ノ結核性變化ヲ呈スルニ拘ラス他葉ハ殆ント全ク侵サレザリシコト是ナリ而家兎ノ甲狀腺ハ人結核菌一万分一白金耳ヲ注射スルトキハ尙感

染スルコトアルモ十万分一白金耳ニテハ感染セス

結核菌ヲ甲狀腺實質内ニ注射セルカ爲ニ起ル變化中尙注意スヘキハ其間質性結締織ノ増殖腺ノ硬變ニシテ又該腺ハ屢々増大シ一箇或ハ多數ノ乾酪變性竈ハ著シク硬變セル組織ヲ以テ圍繞セラル、チ見ルコト是ナリ

脾臟腎臟及睪丸ヲ以テセハ結核傳染試驗ニ微シテ著者ハ甲狀腺ノ是等ノ臟器ニ比較シテ結核傳染ニ對スル感受性ノ少キコトヲ知レリ

牛結核菌ヲ以テセル試驗ノ成績ハ牛結核菌ハ家兎ニ對シテ人結核菌ヨリモ感染力強シト云ヘル從來ノ語說ニ一致シ凡テ之ヲ接種セル臟器ハ最少量ヲ以テシテモ人結核菌ヲ以テシタル時ヨリモ感染遙カニ著大ナルヲ認メタリ又人結核菌ヲ注射シタル家兎ハ内臟器殊ニ肺臟ニ高度ノ結核性病竈ヲ有スルニ拘ラス體重増加シタル者多キニ反シ牛結核菌ヲ注射シ肺臟ニ高度ノ結核性病變ヲ呈シタルモノハ其體重ヲ減少セリ

著者ハ上述ノ試驗ニ據リ左ノ如ク結論セリ

- (一) 甲狀腺ハ脾臟腎臟及睪丸ノ如キ他ノ器官ト同シク實驗的ニ結核菌ノ少量ヲ以テセル直接ノ注射ニ由リ結核症ニ感染ス
- (二) 然レトモ甲狀腺ノ結核傳染ニ對スル感受性ハ上記器官ノ感受性ニ比シテハ少シトス
- (三) 甲狀腺ノ結核性傳染ニ對シ感受少キハ恐ク此器官ノ特異ナル官能的動作ト關聯スル者ナラム

腸ノ所謂伸張潰瘍ノ發生ニ關スル實驗的研究(獨文)

腸管ノ狹窄若クハ閉塞部ノ上方ニ生スルコツヘル氏ノ所謂伸張潰瘍ニ就テハ從來試驗的ニ其發生ヲ證明シタル者無カリシカ著者ハ親シクコツヘル氏ノ許ニ在リテ其實驗的研究ニ從事シ單ニ腸官壁ノ伸張ノミニ由リテ實際潰瘍ヲ發生シ得キコトヲ證明セリ

本論文ハ緒論ト(一)狹窄上部ニ於ケル腸潰瘍形成ニ關スル從來ノ觀察(二)狹窄上部ニ於ケル腸潰瘍ノ病理解剖及病原論(三)實驗的研究(四)終末觀察

及(五)總括ノ數章ヨリ成リ之ニ附スルニ自家ノ動物試驗ニ由リテ得タル伸張潰瘍ノ肉眼的及顯微鏡的著色圖ヲ以テセリ今該論文ノ要旨ヲ擧グルレハ次ノ如シ

緒論 腸管ノ狹窄若クハ閉塞部ノ上方ニ往々潰瘍ヲ生シ爲メニ穿孔性腹膜炎ヲ繼發スルコト有ルハ既ニ臨床家ノ實驗報告セル所ナルモ未タ人ノ注意ヲ惹起スルニ至ラザリシカコツヘル氏ハ深く此危險ナル合併症ニ著目シ腸管ニ斯ノ如キ潰瘍ヲ發生スルハ主トシテ其内容ノ通過阻止セラル、ニ際シ液體或ハ瓦斯ノ蓄積ヲ來シ以テ腸管壁過度ニ伸展擴張セラレ爲メニ之ニ血行障礙ヲ起スノ結果ナリトシ氏ハ之ヲ伸張潰瘍ト名ケタルコトヲ敘訖シ次テ從來「イレウス」ニ對スル手術的療法ノ效果甚タ多カラサルハ一ハ手術ノ時期遲キニ失シ爲メニ斯ノ如キ恐ル可キ合併症ヲ招クニ因ル者ナラムトテコツヘル、ナウニン等諸氏ノ說ヲ引用シテ論述セリ而シテ所謂伸張潰瘍ニ就テハ爾後殊ニブルツツ、ザウエル及フォン、グライエルツ氏ノ報告アリテコツヘル氏ノ說ハ今ヤ多ク人ノ信スル所ナルモ潰瘍發生ノ因由ニ至リテハ學者ノ所見尙一致セサル所アルヲ以テ著者ハコツヘル氏ノ德邁ニ由リ實驗的ニ此問題ヲ解決セントシタル旨ヲ敘述セリ

(一) 狹窄上部ニ於ケル腸潰瘍形成ニ關スル從來ノ觀察 著者ハ腸ノ伸張潰瘍ニ就テハ臨床家ノ之ニ注意スル者尙甚タ少ナキヲ概シ「リテラツール」ヨリ從來手術若クハ剖檢ニ際シテ發見セラレタル本症四十八例ヲ集メテ先ツ腸狹窄或ハ閉塞ノ部位及其性状ヨリ潰瘍發生ノ頻度及其發生部位等ヲ詳細ニ調査シタリ其結果ニ悉シハ腸ノ狹窄或ハ閉塞ノ部位ハ四十八例中結腸S字狀彎曲部ニ來リタル者十九回、脾彎曲部ニ來リタル者九回、直腸ニ來リタル者七回、横行結腸ニ來リタル者四回、上行及下行結腸ニ來リタル者各二回、肝彎曲部、盲腸及回腸ニ來リタル者各一回、閉塞部位ノ記載ナキモノニ二回ナリ又腸狹窄若クハ閉塞ノ性状ヲ見ルニ其最多數ハ腸ノ癌腫ニシテ三十回ノ多數ヲ占メ之ニ次クハ癒著及索條形成六回、

軸旋四回、腸周圍ニ於ケル腫瘍ノ壓迫三回、大便閉塞二回、腸結核症一回、腸ノ屈折一回及内「ヘルニア」ノ嵌頓一回ナリ

次ニ潰瘍ハ腸官ノ各部ニ發見セラレタルモ盲腸及之ニ接續スル脚即チ回腸、上行結腸及横行結腸ニ來リタル者多數ニシテ盲腸ニハ十八回、回腸、上行ノ横行結腸ニハ各十回ヲ算シ餘ノ部ニ生シタルハ罕ナリ即チ伸張潰瘍ハ何レモ狹窄若クハ閉塞部ヲ距ルコト多少遠キ部位ニ生スルヲ常トセリ此他潰瘍ニ繼發シタル腸ノ穿孔竝ニ腸壞疽モ亦潰瘍ニ於ケルカ如ク盲腸ニ來リタル者多數ヲ占メタリ

(二)狹窄上部ニ於ケル腸潰瘍ノ病理解剖及病原論 著者ハ先ツ自己ノ集メタル四十八例ニ就テ更ニ伸張潰瘍ナル者ノ狹窄直上部ニ存セスシテ通常該部ヲ距ルコト稍々遠キ部位ニ存スル者ナルコトヲ注意シ次テ潰瘍ノ數大小、形狀、邊緣及底面ノ狀態其他潰瘍ノ深淺ヨリ又之ニ繼發シタル腸穿孔ノ數、穿孔口ノ大小及形狀、潰瘍及穿孔部周圍ノ狀態等ヲ精細ニ論述シ更ニ病原論ニ於テハ腸狹窄上部ニ生シタル潰瘍ノ原因ニ就キ從來諸家ノ懷ケル所說ヲ詳述シ或ハ之ヲ主トシテ壓迫壞疽ニ歸シ或ハ主トシテ炎症ヲ以テ其原因トナス者アレトモ獨リコツヘル氏ハ腸狹窄上部ニ蓄積スル液體或ハ瓦斯ニ由リ腸管過度ニ伸張擴張セラレ爲メニ腸壁内ハ鬱血ヲ來シ次テ溢血ヲ生シ此際腸上皮ノ營養障礙セラレ、チ以テ先ツ粘膜炎層ノ壞死ヲ來シ之ニ次クニ潰瘍ヲ以テシ病機更ニ増進スルヲ遂ニ腸ノ穿孔ヲ來ス者アリトシ而シテ斯ノ如キ潰瘍ノ發生ニハ必常腸壁過度ノ伸張ヲ伴フチ以テ氏ハ之ヲ伸張潰瘍ト名ケタルコトヲ說キコツヘル氏ノ此說ハブルツツ氏ノ首トシテ賛同セル所ニシテ氏ノ剖檢ニ由テ得タル伸張潰瘍ノ顯微鏡的検査ニ由リ潰瘍發生ノ機轉ヲ第一伸張、第二鬱血、第三血塞、第四出血、第五壞死、第六崩潰ト爲シ氏ハ此伸張潰瘍ヲ血塞性潰瘍ト認メタリクロイテル及フォン、グライエルツツ氏モ亦コツヘル及ブルツツ氏ト略ホ同說ナレトモザウエル氏ハ組織學的検査ニ基キ之ヲ壞疽性或

ハ「チフテリ」性潰瘍性腸炎ニ因ル者トセリ
最後ニ著者ハ盲腸ノ過度ノ伸張性ニ就テ其伸張潰瘍ノ發生ニ關係アルコトヲ論述セリ

(三)實驗的研究 著者ハ先ツ伸張潰瘍ノ發生ニ關シテハ既ニブルツツ、ザウエル及フォン、グライエルツツ氏ノ精密ナル組織學的検査ヲ經タルモ實驗的ニ斯ノ如キ潰瘍ヲ發生セシメ得タル者ハ未タ之レ有ラサルコトヲ述ヘ而シテ最初ニ自家實驗ノ方法順序ヲ細說シ次テ實驗ニ由リテ得タル伸張潰瘍ノ肉眼的及顯微鏡的所見ニ就テ詳細ニ敘述セリ

著者ハ實驗ニ供シタル動物ハ悉ク犬ニシテ實驗ノ方法トシテハ麻醉ニ乘シテ開腹術ヲ施シ小腸ヲ腹創ヨリ牽出シテ蹄係ヲ作り先ツ之ニ腸吻合術ヲ施シタル後吻合部ノ附近ニ於テ其兩方ノ太キ絹絲ヲ用ヒテ結縛シ其中ニ空氣ヲ吹キ入レテ腸蹄係ヲ伸張擴張セシメタリ腹蹄係ノ長サハ約三十乃至六十仙迷ニシテ其中ニ空氣ヲ吹入スルニハ最其一方ヲ固ク絹絲ニテ結縛シ次テ他方ニハ腸管ニ小切開口ヲ設ケテ之ヨリ腸管内ニ小硝子管ヲ挿入シ其上ヲハ同シク絹絲ヲ以テ假リニ結縛シ置キニ連護膜吹球ヲ用ヒテ適度ニ空氣ヲ蹄係内ニ吹入レタル後快手ニ硝子管ヲ拔去シ更ニ絲ヲ固ク結縛シ囊ニ設ケタル腸ノ小切開口ニ直ニ總合閉鎖シタル後今ヤ空氣ヲ以テ緊滿擴張セラレタル腸蹄係ヲ注意シテ腹腔内ニ還納シ腹創ヲ縫合セリ
斯ノ如クニシテ腸管ヲ伸張擴張セシメテ一定度ニ達スルトキハ腸蹄係ハ全然蒼白色ヲ呈シ一滴ノ血液タモ腸壁内ヲ流通セサル如クナルモ此瞬間ニ於テ内壓ヲ減少セシメ緊張セル腸管僅力ニ弛緩スルトキハ忽チニシテ腸壁ニ高度ノ靜脈性充血ヲ來シ腸蹄係ノ全部暗赤色ヲ呈スルヲ見ル著者ハ此試驗ニ於テ腸管ノ可ナリ蒼白ナルマテ其中ニ空氣ヲ吹入レ之ヲ伸擴張セシメタル方其度ヲ過クルトキハ腸管ハ殆ト全部壞死ニ陥ルヲ常トセリ

著者ハ二十四頭ノ犬ニ就テ三十四回ノ試験ヲ施シタルカ上述ノ試験ヲ施シタル者ハ二十七回ニシテ之ニ由リテ腸ニ潰瘍及穿孔ヲ發生セシメ得タルハ僅々三回ニ過キサリキ

著者ハ實驗ニ依リテ得タル三回ノ腸標本ニ就テ先ツ概括的ニ肉眼の所見ヲ詳述シタリシカ腸壁ノ處々ニ大小、深淺、廣狹種々ナル數多ノ物質缺損ヲ認メ物質缺損ノ最モ高度ナル所ニハ腸壁處々ニ全ク穿孔セラレ、且物質缺損ノ周圍ニハ常ニ著シキ血液浸潤ヲ呈ス次テ著者ハ是等ノ標本ヨリ數多ノ連續切片標本ヲ製シ組織學的検査ヲ行ヒタルニ外觀ノ高度ノ充血ヲ呈スル所ニ於テハ粘膜ニ變化ナキカ或ハ其上皮處々ニ壞死ニ陥リ粘膜下組織ノ血管ハ常ニ著シク擴張シテ多クハ血液ヲ充盈シ且漿液膜下組織ニモ著明ナル充血及一二ノ溢血ヲ認ム潰瘍所在ノ部ニ於テハ物質缺損ハ粘膜下組織又ハ筋層内ニ達シ其深部ニ達シタル者ニ在リテハ潰瘍ハ亦周圍ノ粘膜下組織内ニ穿入スルヲ見ル而シテ缺損部周圍ニ於テハ血管ハ常ニ著シク擴張シテ血液ヲ充滿シ處々ニ血塞ヲ生スルヲ認メタリ又穿孔口ニ接スル腸壁ヲ見ルニ著シク菲薄トナリ粘膜ハ全ク缺如シ周壁ハ只半ハ壞死セル筋層及漿液膜ヨリ成リ此部ニモ擴張シタル血管中ニ血塞ヲ生シタル者アルヲ見タリ

(四)終末觀察 著者ハ此章ニ於テ更ニ狹窄上部ニ於ケル潰瘍發生ニ關スル從來ノ諸説ヲ列擧シテ之ヲ批評シコッヘル氏ノ伸張説ノ最モ信ヲ措ク可キコトヲ論シ著者ハ實際只伸張ノミニ由リテ腸潰瘍ヲ發生シ得ヘキコトヲ證明シタルコトヲ述ヘ伸張ノ爲メ腸ノ壞死ニ陥ルハ一ハ甚タ過度ナル伸張ノ爲メ動脈性血行ノ歇止スルト又一ハ高度ナル伸張稍々長ク持續スルトキハ血管ノ麻痺ヲ來シ此際腸壁ノ緊張減退スルトキハ高度ナル鬱血ヲ起シ爲メニ大ニ血行障礙ヲ來スニ因ルトセリ而シテ著者ハ伸張ノ爲メ潰瘍ヲ生スル主因ハフルツツ氏ノ説ノ如ク鬱血性出血ニ在ルナラムトセシモ此鬱血及出血ノ原因ヲ亦主トシテ血管ノ麻痺ニ歸セリ又著者ハ此鬱

血性出血ハ殊ニ粘膜下組織ニ來ルコト最モ高度ナルヲ以テ之カ爲メ延テ粘膜ニ壞死及潰瘍ヲ來スハ甚タ賅易キ者ナルヲ論シ且伸張ノ爲メ腸ノ穿孔ヲ來スハ腸壁ノ内外共ニ最モ高度ノ血液性浸潤ヲ蒙ルニアリトセリ

(五)總括 著者ハ自己ノ實驗ノ成績ヲ次ノ如ク總括セリ

- (1)腸潰瘍ハ實驗的ニ單純ナル腸ノ伸張ニ由リテ發生セシメ得ヘシ
 - (2)然レトモ高度ナル腸ノ伸張ハ腸壁ニ於ケル動脈性血液流入ヲ歇止セシメ其結果トシテ速力ニ貧血性壞疽ヲ生ス
 - (3)之ニ反シテ長ク過度ニ伸張セラレタル腸壁ノ緊張減退スルトキハ血管麻痺ノタメ腸壁内ニ強キ靜脈性充血ヲ起シ該充血ヲシテ甚タ高度ナルトキハ均シク壞疽ヲ發セシム
 - (4)潰瘍或ハ又穿孔ハ血管麻痺ノ爲メ強キ鬱血ヲ起スニ際シ腸壁ノ一二部壞死ニ陥ル所ニ生ス
 - (5)斯ノ如キ壞死ハ一方ニ於テハ鬱血ニ基ク出血ニ由テ發シ此出血ハ亦血塞形成ニ由テ助長セラレ可シ又他方ニ於テハ過度ノ伸張ニ由リ障礙ヲ蒙リタル腸壁ノ榮養障礙ニ由リテ催進セラレ
 - (6)腸壁ニ實驗的ニ起サシメタル潰瘍或ハ穿孔ニ於テハ細菌或ハ腸内容「トキシシン」ノ影響ハ問フ所ニ非ス
 - (7)細菌ハ茲ニハ只潰瘍性病機ノ後ニ至リ進行スル場合ニ一定ノ關係ヲ有スルナラム
 - (8)臨床上腸狹窄ノ上方ニ認メラル、潰瘍ハ恐ク腸ノ過度ノ伸張ニ由リテ發スル者最モ多カラム
 - (9)是故ニ「伸張潰瘍」ナル名ハ腸狹窄上部ニ潰瘍ヲ形成スル場合ニハ特異ナル者ト謂ハサル可カラス
- 以上論文ハ學術上有益ニシテ下平用彩ハ醫學博士ノ學位ヲ授與セラレヘキ資格ヲ有スル者ト認定ス

漫 録

● 涕泣の研究

福田 美 明

泣くこと云ふ事は何人も経験し、味ふ事柄で母の胎内を出づるや「オギャ」と叫ぶ産聲も亦一種の涕泣である、進んで身の不幸に泣き、世の冷酷に咳ぶも亦等しく涕泣である、彼の可憐の孤兒が飢に泣き、憂國の士が悲憤の涙にくれ、花の如き乙女が戀に泣くも同じく涕泣である、樂しき時の嬉し泣、悲しく淋しき折の悲し泣、くやし紛れのくやし泣きのそれも亦一種の涕泣に過ぎない、觀じ来れば涕泣も其發生、種類、意義に於て非常の差別を有して居るのである。

涕泣の原理

涕泣とは吾人否生物の感情表現の一方法である、然し涕泣必ずしも感情の表出的運動ではない、吾人は度々何等感情の伴はぬ涕泣を見る、かの精神病者の病的に無理に泣かせらるゝ追泣、神経病患者に度々見る強迫的涕泣や女郎衆の游治郎を腦殺する空泣等は何等感情を具備して居ない、亦幼兒痴人の涕泣も何等悲哀苦辛の情を帯びる事なく、唯自己の慾望を満たす要求の一方法として屢次用ゐらるゝを見る、故に涕泣は吾人情調の消極的方面のみの現出に非ずして少くも苦樂悲喜を論ぜず感情の極度に現れ来る一種の運動たる時と、故意に擬動的運動によりて涕泣を摸するものと、今

一つは病的によつて来る追泣と、反射性に發する涕泣例へば産の機會に擧ぐる産聲との四つに區別するを至當と考ふ。

涕泣の本態

涕泣は、感情の一大表現で、感情の亢奮に基づいて身体の諸臓器に一種の運動結果を與ふるもの、かの涕泣の顔面蹙皺は顔面筋の痙攣收縮に基づき、涙の流るゝのは涙腺の分泌作用亢進である、唯に其れのみならず慟哭し或は嘔り泣きの際には泣聲を發し身体を震盪せしむるのも等しく聲帯や呼吸機々官や身体諸筋の運動に基因するのである、生きたる動物には熱き血汐が流れつゝあるので、事に感じ物に觸れて情激し神動くは當然で其情調に一致する身体筋肉裝置の運動が則ち涕泣となり笑ひさなるのである、斯くも精神機轉を伴つた涕泣は眞の涕泣である。

涕泣の種類

眞の涕泣にも亦種類がある便宜上下の如く分けて見よう。

第一は最も下等な涕泣で仮に動物的涕泣と命名しよう、則ち飢に泣き、恐懼の折驚いて泣くが如き是で、何等高尚なる感情に支配されぬものである。

第二は淋しさの餘り泣く、所謂孤獨に泣くので、自己の小なるを知り他に頼らむとすする女々しい泣き方で是を嘆願性涕泣と名づく、此涕泣は下等な涕泣で男子の嫌むべきもの、一つである、彼の遊女の涙や子女の涙は此類に屬するのである。

第三くやし泣、是はくやし紛れに泣く一種の憤怒性涕泣である。

第四苦し泣、身体上精神上の苦痛に泣くので一方では意志の薄弱さあきらめの心さがない証である、非常な叱責を蒙つた場合、大手術を受けて堪へ難き苦痛を受けた場合に泣くので、青年男女の戀に泣き愛に泣くのも言ひ得ぬ心の苦痛に泣く苦し泣である。

第五悲哀性涕泣、悲しさの餘り泣く是が涕泣の重なるもので、人に別れ

父母兄弟に逝かれ、思はざる不幸に相遇し云ふ可らざる悲しみの情が脳裡に溢れて不思涕泣するそれである、是は涕泣中高尙なる部に屬するもので、進んでは國家を想ふ餘り家を思ふ極、慷慨悲憤慘然たる涙も此の悲哀性のもので、世に男泣き或は泣いて血を吐くこと云はるゝも皆此悲哀性の涕泣である。

第六同情の涙、人間は感情の動物である、自己の苦痛を悲しむと同時に他人の苦痛をも悲しむの性質を有するのである人は能動性に涕泣し得るさ同じく被動性にも涕泣し得るのである則ち他人の悲しみを聞きし時其人の心中を察して憐れを催し或は悲惨なる實話を能く多勢を泣かしむるので、此「もらい泣」は同情の涙である、温き血液の循環する人間には此同情の涙が必要である事は明である、然し泣くこと云ふ事は必ずしも同情でない、眞に其人を思ひ眞に其事柄を憂ふるのが初めて温き同情の涙となるのである。

第七嬉し泣、今一つ風變りの涕泣がある、是は嬉しきの餘り泣くので嬉性涕泣でも稱する方が良からふ、非常に嬉しき時、多年離れて生死も定かならぬ親子の不圖めぐり會ふた時、非常に辛苦の結果成功の域に達せし時、知らぬ人より優しく言はれし時何等悲しみの情がなひにかはらず涙が出るのが是である、一人人間の感情表出にも度がある、僅かの悲しみにも泣けてくならぬのに、父に別れ母に逝かれいさしの妹に先きだくれ又ははも云へぬ苦痛に相遇せし非常の悲しみの極は涙もなく、聲も出でず反つて淋しい笑ひが唇を漏るゝ事が度々あると同じく感情の極度に至れば矛盾性の表情現出を來す事を知るのであります、感極まりて言ふ所を知らないこと云ふのは未だしも涙も出ない事があるのであります。

以上は涕泣の一部分的研究に過ぎないが要するに涕泣は種々の方面に實驗せられ經驗せらるゝのである、實に涕泣は吾人の感情表現の一大方法で其情調に至りては多少の差を見るのである、又國民性の如何によりても涕泣の

價値が異なつて居るのである、彼の支那人の如き形式的涕泣は嫌むべきの極で要は泣くべきに泣き泣くべからざるに泣かぬのである、下等なる涕泣、女々しい涕泣は吾人の取らざる所で高尙なる情調に基く涕泣に至つては耻づべきものに非ざるを信するのである高尙なる涕泣は高尙なる精神の波瀾である文である、恰も日に晴雨あるが如く五雨十風は實に吾人の命である、人の精神を高尙ならしむるものは完全なる教育である、完全なる教育とは嚴格冷淡なる教導鞭撻に忙ずして温き慈愛に満てる啓發的誘導である、家庭に學校に此温き情が満つる時社會は期せずして温かく化するのであらふと思ふ。

● 彌次 録

在新瀉 楠田利一郎

題して彌次録となし茲に改めて卒業當日云はんと欲して其機を得ざりしもの及其後の雜感を例により忌憚なく披瀝せんこと然れども彌次馬は要するに飽く迄彌次馬也、秃筆を呵して何の効あるや知らず徒に紙面を汚し學窓にある諸君の談笑たらんのみ而も敢てなす、數奇者の囁語たるに恥ぢざるか

卒業當時の感想

▲偽善家に唾す。絲々たる現代面諷腹嘲、表は裏非の徒輩の跋扈驚くに堪へない而も世は以て才子、大人とみなす偽善家萬歳なるか故、然れども余は寧ろ偽惡的の傾向を愛するそこに囚れざる強味と男性美の潜在なきや古人が惡まるゝ人さなるも憫まるゝ人さ爲る勿れと云ふたが面白い我々は青天白日の下に強き優者として生活したい陰險なる小刀細工を弄し外表を粉飾するの奴輩畢竟奚ぞ巧言令色、人の鼻息を仰ぐ女化せる男子の

形骸のみ
余は愚僧に服せられて佛果を得よと引導した和尚より糞さなれ喝！と云つて鯉を食した小僧の天真無垢を尙ぶ、孔子曰く「是故に夫の佞者を惡むと余も同感である

莫遮、「人事百年論未定」西郷翁は當時の賊である然るに其の淨光明寺の墓畔は香火斷はず大久保公は當時の官である而も其の清水谷の碑前は諸人稀なりと聞く什麼生這裏の消息？人生は意氣に投ず功名誰か論ぜんや

▲金の問題。現代の青年は活氣に乏しい、利己的である口を衝いて出る所のものは金である以て當世式となし縁々とし、國家社會を論ずるものは曉星より稀なり我が將來を奈何せんを憤慨し鞭撻する先輩が多い然れども懐ふに時代の推移は吾人に生活難、就職難を目前に示し自覺す可く餘儀なくせしめし結果にあらざるが血氣の青年誰か青雲の志なからん而して又誰か武士に食はれぬ高楊枝などの迂を學ばんや正に現代の青年は「河豚は食ひたし命は惜しい」の体である此に於て志望の撰擇に餘念なし先年某教育家は青年の醫科志望の大多數にして精神的方面に志すの少きを慨せり而も依然として我が醫科は多數の志望者を有す最近軍人志望者の著しく増加しつゝありと聞く嘗て誰やらが青年の志望數に依りて其時代思潮の一部を窺ふことを得と云へり敢て母校の諸君に借問す諸君の理想は奈邊に存すか

▲醫師の充實。世人は常に金を儲けるには醫者に限ると云ふ果して然るか金満家の醫者何人がある驪て又社會的に認めらるゝの人物何人がある、哀しいかな十指に足らざるに非ずや果して然らば醫は以て男子の一生を托すに足らざるか？否余は醫學の如何は以て其國の文野を卜さるゝものご信ず（此論は畧し記さず）

莫遮我國に於ける醫師數は實に三万六千七百〇九名（昨年末現在數）の多

數を有し之を人口に比するに醫師一人につき人口一三九二人強なりと更に之を年々増加する人口數及醫師數に對比し同様の比例を保たしむるには年々一〇〇餘名の醫師過剰を來すと云ふ

今更に種々の統計を參考とし畧算し左の如く得たり

我國に於ける人口一〇〇〇に就き平均死亡數 約二〇名
死亡一人に就き平均三〇名の患者ありとせば其患者數 六〇〇名
平均疾病期間を約二十日とせば年平均延患者數 一二〇〇〇名
平均一患者より二〇錢の収入ありとせば年収入 約二四〇〇圓

故に年々の過剰醫師數等あるを以て醫師一人に對し人口一〇〇〇とせば大凡醫師の年収は二千四百圓なり此中より賃費、飲み倒し（開業醫には意外に多しと聞く之を強制治療と稱す一先輩は苦笑せり）等を差引く時は吾人の實収入は案外小額のものたりむべなるかな金満家の少き、之で落膽する人ありやさる人は投機に改宗すれば或は成金たり得んか然れども吾人は尙糊口に窮し生活難を訴ふるには前途程遠し、將來ある社會的方面に吾人の開拓を待つもの大なり邦家文運の先導者！先づ衣食足りて後顧の患なし、緊陣一番起て吾曹の意氣を示さずやさらば母校も健在なれ、さらば學窓の諸君願はくば強き健者たらんことを期せよ

さらば金澤

思ひ出せば早や半昔、幽邃明美の兼六の地に留りしも今や去るに臨み何さなく物の哀れを感じ候其日雪降り最後の北國振りを遺憾なく味はひ候凜雷一聲東都に上り候が表日本は快晴殊に東海の天に超然として聳ゆる不二の雄姿を仰ぎ候節は何時もなから思はず襟を正し候さる程に新橋に着候相變らず東京は活氣ある華やかな所に候上野にて文部省の美術展覽會を見物候が不風流の門外漢には只美麗と云ふ外御座なく候が轉じて拓殖博覽會にては今更ながら我國の海外發展と好望なる活動地の多きに一驚を喫し候吾人の將來も之等の地に活躍したきものに候

翌日醫科大學に先輩笹岡芳名氏を尋ね皮膚科教室を參觀候無數の蠟摸型等につき説明下され候尙當教室にては理學的療法殊に「ラジウム」の研究は盛に候土肥教授、田中助教授にも紹介下され光榮に存し候同氏には種々厚意に預り候事を此に感謝したく候夕刻御承知の日新醫學社の講演會傍聴候藤浪氏の「レントゲン」の醫學上應用、北島博士の急性傳染病の診斷法、土肥博士の皮膚結核の診斷及治療法等有益にして興味あるものゝみに候らひし醫學の本場は要するに東京に候

小生等は地方にあるも年一回位は上京し醫學の大勢を窺ふと共に刺戟を受け來る事は是非必要かき考へ候然らずんば早晚竹庵たるを免れず感ぜしめ候

其後二日間順天堂にてドクトル藤浪氏の厚意により「レントゲン」を見學候現今は醫化學と理學の大流行、大研究時代かき愚察候尙二三の病院參觀したき考へに候らひしか時日之無く殘念ながら切上げ候

其外に青山に神さりまし、明治天皇の御跡を拜し更に乃木將軍の墓前に詣で候將軍の全行動は俯仰天地に愧ぢざるものにて吾人の感佩惜く能はざるものに候宜なるかな諸人絶ゆることなく候今一つ好機會を得て衆議院を參觀したる事は小生の満足したる事に候議席に着き獨舞台にて壇上に進み場内を見廻し北東笑み候處代議士氣取りださ大に冷評され候

兎に角短時目にて方々彌次り面白かり候が殘念とする所は例の岡田氏靜座法の御本尊(小生は腹式呼吸の崇拜者に候)と救世軍の山室軍平氏に面會し議論を叩くを得ざりし事に候

長々冗文書き綴り候が實は小生さる人の上京後研學に先ち貴重の時間を約一ヶ月も電車賃其他に費し恰も洋行でもした様に一向勝手不知の爲め落付かざりし由承り候或は慎重の態度に出でられしやも知れず候が餘りさ存し或は例外に候はんも小生の六茶苦茶の彌次振を披露候次第惡からず御用捨被下度候早々

新 潟 よ り

▲醫學評。僕は我國の醫專校を三大學に見立てば千葉や岡山は先づ老成の東大に比す可く我が金澤は或は早老振はざる福大に比す可く、而して新潟は正に新進氣英の京大に比す可きか(僕は此地に來たからそ一云ふのではない)と思ひしに果して當醫專は新進氣英の教授達が多い解剖の布施、病理の川村、藥物小兒科の岩川等が其最たるもので今年中に博士が三四人も出來るこの評だそれに生徒も仲々やる先日島田先生を解剖實習室に訪ふたが生徒は悉く原書を廣げて居る病理の「ゼクチオン」を觀に行つたが先生は生徒の前で「ペフンド」を獨乙語で云つて知らぬ顔をして居られたまだ外來がないから知らないが或は「ポリクリニク」は獨乙語でやるかも知れん兎に角一般に獨乙語が出來るには驚いた、それより玉消はたのは我が母校の發展であつた僕の見立てか誤つて居つた實は眠れる虎であつたぞ知れたのだ

殆ど同時に奮闘の人、醫化學の大家、須藤博士及、皮膚科學の堯將殊に理學的療法に造詣深き土肥博士の任命された或は吾人に何等かの暗示を與へたのではないか兎に角母校は新校舎と共に一學風を將來に作るに相違ない在校の諸君は幸福である而し覺悟や如何?

▲獨乙語の必要。今更ら斯んな事を叫ぶのは陳腐かも知れないが僕は痛切に感じたのである大學其他の大病院に行けば卒業出のほや／＼は先づ既往症取か處方書きだが獨乙語で書く力があれば恥をかゝす或場合には鼻が高いのであるから然らずんば大に狼狽し悲觀しなければならぬのである我々は卒業すれば大抵は一二年は研學しなければ一人前には悲しい事にはなれない多くの何れの先輩も吾人の臨床的技術に欠けて居るのは認めて居る制度の然らしむる所當然で實地に就く所以も此にあるので大くは替めないが獨乙語が駄目と來ては相手にしない慘なもので折角、「エーブンク」に豊富でも此方で御免蒙らざる得ざるに至るのである故に成

書を讀み、雜誌を抄録し病歴、處方を書き得る様心掛くるは當面の急務でなかるゝか或は支那語も必要かも知れないが徒然草の某僧の如くに終らんかを僕は私かに恐れる

序に或先輩は我々は獨乙語さへ出来れば恐るゝに足らん井蛙に終るより都會に出で研究するのには得策た又或人は「可愛小供に旅させる」は眞理た母校に留るより去て他に行くは刺戟となり將來の爲に宜しき僕にはまだ經驗がないが參考の爲に附記しておく

●新潟在住金澤醫專出身者會

年末に際し母校出身者が一同に集り互に金澤式に快談する事が出来たのは嬉しい世は歳暮の忙しさも茲は春風駘蕩さして温く會するもの、皆笑顔談湧くか如く殊に母校今回の發展を賀した

時偶ま縣會出張中の議員、山本晋氏(母校出身)前日の縣會活劇中の人となり負傷せられ頭部に繃帯して居られた)緊急動機ありと叫ばれた譯でないが先年より思ひ付かれつゝありし新潟縣在住の金澤醫專出身者大會の計畫を提出せられしが満場異議なく即決來秋に花々しく發會式をなす事なれり關係諸彦奮て御賛成あらん事を茲に提灯持す

斯くて和氣藹々の中に充分歡を盡し母校の發展を祝して散會せり當日の出席者は次の如し

- 縣會議員 山本晋 (北魚沼郡小千谷町)(二三年)
- 醫專教授 島田吉三郎 (二九年)
- 竹山病院内科 安田三木 (三八年)
- 監獄醫 池田菱吉 (三八年)
- 醫專附屬病院内科 金子義長 (四一年)
- 同 關承吾 (四二年)
- 竹山病院内科 古屋強 (四三年)
- 長谷川病院内科 寺本於菟男 (四四年)

- 醫專附屬病院外科 川上操一 (四四年)
- 長谷川病院外科 村山三男三郎 (大正元年)
- 醫專附屬醫院内科 木下熙 (同)
- 同 耳鼻科 水谷眞鉄 (同)
- 若杉病院内科 五十嵐齊 (同)
- 醫專附屬醫院皮梅毒科 楠田利一郎 (同)
- 因に記す川上操一氏は久しく當醫專校附屬醫院澤田内科に於て研究更に外科學一般を修められ近々郷里佐渡に於て開業せらるゝ由氏の敏腕必ずや門前市をなす可し折角加餐斯學の爲大に氣を揚げられん事を祈る。



通信

●十全會新潟支部通信

昨年十二月二十五日新潟市在住金澤母校出身者一同會合仕候十全會新潟縣支會の設置に付き相談も有之候

- 山本晋 池田菱吉
- 島田吉三郎 金子義長
- 五十嵐齊 川上操一
- 古谷強 木下熙
- 關承五 安田三木 (卅八年出)

寺本於菟男

村山三男三郎

水谷眞鐵

最後に亂筆を以て末席を汚すの光榮を得候今夕は殊に先輩縣會議員山本様を始め醫專教授島田先生、監獄警長池田様御出席下され後輩の生等にも有益の御談下され多大の有益と興味を得候

將來本會も益々發展の様承り大に愉快を感じ候
母校も其後益々御發展の由慶賀此事に御座候將來に於ける北陸大學の實現も近き事と察す

楠田利一郎

●小島佐藏氏通信

(二十三年卒業。大坂市開業。十全會宛)

(前畧)當地同窓會の事に付きて御尋ねに預り早速御回答可申上答の處他行中にて昨日歸阪致候次第旁不圖延引仕候儀不惡御了恕被下度願上候目下追々會員も増加致し年々盛況の方に相向ひ候へ共何分昨年度より御承知の通り御大喪中の事故懇親會を開く機を得られず猶亦會員中に住所變更の方も澤山出來居り從て是等の事に付きて目下取調中に付委細御報道申上兼候へ共在阪中の同窓は互に氣脈を相通し親睦に罷在候段は誠に何よりの幸福と存居候何れ住所録諸事調査の上は御一報可申上候へ共從來の會員規則に候へ共不取敢一部貴覽に供し候間御一覽被下度候右左略儀御禮旁御回答申述度早々如此御座候敬白

二月十日

大阪市南區眞法院町

小島 佐藏

金澤醫校同窓會々々

第一條 本會ハ大阪市及神戸附近在住ノ金澤醫校出身者及同校ニ縁故ア

ル者ヲ以テ組織ス

第二條 本會ハ金澤醫校同窓會ト稱シ同窓者懇親ヲ謀ルヲ以テ目的トス

第三條 春秋各一回會員ノ總會ヲ開キ時宜ニヨリ大阪市内會員ハ茶話會ヲ開會スルコアル可シ

第四條 本會ハ會務整理ノ爲メ大阪市内現任會員中ヨリ幹事二名ヲ互選シ任期ハ一ケ年トシ但重任ヲ妨ケス

第五條 本會々員中吉凶ノ際ハ互ニ相訪問スル者トス

第六條 本會々員ハ總會ノ時幹事ヨリ通知セル金額ヲ納メ其他隨時徴收スル者トス

第七條 本會ニ記事録一會計簿一會員名簿一ヲ調製シ幹事保管ノ責ニ任ス

第八條 本會事務所ハ當分ノ内大阪市南區天王寺眞法院町小島佐藏宅ニ置ク

右ハ明治四十三年十一月二十日寶塚溫泉場分銅屋ニ開キタル本會定期總會ニ於テ決定ス

金澤醫校同窓會

大阪市内會員

大阪市立衛生試驗所内

全 市東區南久太郎町四丁目五十五番地

全 市南區天王寺上本町八丁目五八八

全 市西區阿波堀三丁目二四

全 市東區淡路町一丁目二二

全 市南區木津鷗町二丁目二三四

全 市北區此花町一丁目一八

全 市北區上福島北三丁目

全 市北區上福島三丁目ラカン北

北 豐 吉

高柳元六郎

小島 佐藏

島山政彰

濱地藤太郎

折口 靜

梁 達 男

島崎龍也

黒川靈巖

全市全區北野高垣町二四八六
 全市全區安治川通三丁目一四一
 全市全區鹽町一丁目三〇
 全市全區岡山町三七四
 全市全區赤十字社病院內
 全市南區長堀橋三丁目四八
 全市東區內安堂寺町二丁目一八二
 全市南區逢阪上ノ町山田病院
 大阪府警察本部內
 大阪市立衛生試驗所內
 全市西區江戸堀南通二丁目
 全市東區逢阪上ノ町
 大阪市立衛生試驗所內
 大阪府下在任會員
 大阪府下豐能郡池田町
 大阪府泉南郡新家村七五
 大阪府西成郡津守村尼崎紡績會社醫局
 大阪府三島郡福井村字福井
 大阪府泉北郡大津村
 全市 郡橫山村
 全市 郡南陶器村
 大阪府西成郡川北村治賴病院
 大阪府西成郡勝岡村
 大阪府北河內郡嵯峨村字出口
 大阪府西成郡鷺洲町字海老江
 京都市及府下在任會員

山內順治
 政山龍雄
 木村孝藏
 石黒三千雄
 中谷正範
 谷中正勝
 道上修己
 山田幸吉
 松王數男
 深澤治三郎
 猪飼史郎
 貴島善兵衛
 森茂
 瀬戸卯三郎
 松本常次
 松波操
 彦阪誠一
 八木徳太郎
 小野林利一
 澤田外三郎
 津山弘
 橋内兵治
 澤田辰造
 和多利勇作

京都市新町尾池上ル松山病院
 全市
 全市上京區聖護院町西畑五一ノ三
 全市油小路高辻上ル岩崎方
 全市醫科大學解剖教室
 全市上
 全市醫科大學皮膚華科教室
 全市醫科大學耳鼻咽喉科
 全市
 兵庫縣下及神戸市在任會員
 神戸市川崎造船所病院
 神戸縣立病院內
 神戸市橫濱生命保險神戸支部內
 奈良縣會員
 奈良市公納堂町
 奈良縣宇陀郡宇陀村字松井
 和歌山縣會員
 和歌山市赤十字社病院

松山爲雄
 下阪雄太郎
 大西克孝
 名取博三
 岡島敬治
 島田吉三郎
 吉田又平
 戶井源吉
 内田貞春
 石阪直次郎
 石阪伸吉
 松尾等
 鎌尾万明
 淺田耕造
 淺利義治
 岩井尊宗
 山内馨次郎
 本城熊次郎
 吉武安男
 柴原外男
 松森佐一
 具增省義
 上田茂

徳島縣會員

徳島縣石井町

富野佳照

岡山縣會員

岡山醫學專門學校内

桂田富士郎

全上

上阪勝熊

●杉山貞二氏通信

(四十二年卒業。在朝鮮。十全會宛)

(前略)小生義昨年六月迄郷里に於て愚兄と共に開業致居候ひしが七月鮮内地視察の目的を以て渡韓仕り釜山京城仁川を経て當光州府に入り表記の醫院に在職罷在候て内都地方視察の希望有之候ひし爲め殊に巡回診療部を擔任罷在候當朝鮮にての巡回診療は各道慈惠醫院に有之候て恩賜金及濟生會寄附金利子を以て一般鮮人の施療施藥の費にあて居申候此巡回診療は醫員一名藥劑師一名にて當全羅南道所屬各郡廳所在地に數日滞在致し施療致すものに御座候當醫院は醫局醫員三名院長一等軍醫氏家醫學士醫員に千葉出身一等軍醫と小生に御座候藥局部は藥劑師二人雇員一名庶務書記二名外に病理試驗室に雇員一名診療所に雇員二名看護婦九名(見習共)今度齒科新設致され齒科醫一名に御座候病室は傳染病室に「ベット」八普通病室に拾貳他は施療病室にて所謂朝鮮式の温突(「カンドル」)と申候床に肩平なる方二尺位の切石を敷つめ上を粘土にてぬり更に此上に濾紙を貼り此下より薪をたきて暖を取る室に御座候)病室に候

當院客年十二月中の外來患者新患數を左記致候

内地人 男 百三十人 女 百二十三人 計 二百五十三名
鮮人 男 二百五十一人 女 八十四人 計 三百三十五名
通計五百八十八名にして一般に鮮人は皮膚病最多く消化器病花柳病此に次

き申候消化器病中寄生性疾患膿虫患者非常なるものに御座候こは生肉(牛豚鶏犬)を食する爲めと存候生活狀態單調の爲めか神經系精神病は僅少に御座候外科は内地醫に信賴篤きも内科は生活狀態及食物内地人と異なる故を以て其効驗を疑ひ却て朝鮮在來醫の草根木皮を信賴するもの多き傾向有之候一般に民土及衛生思想の低きにはあきるくの外無之候茲十年間位は内地人の單獨開業は覺束なき儀と被存候

母校出身者の中同期生としては津田治助君は鎮南浦大岡醫學士方に慶尙北道榮川守備隊に平野郷次郎君同安東に北村一清君江原道平尙守備隊に伊藤善次君羅南衛戍病院に大野幸重君勤務致居られ申候

内地と異り當地方は殊に「ライツコース」の状態に御座候へば時々御刺戟仰ぎ度今後共宜敷御教示の程奉懇願候(下略)

大正二年一月十九日

朝鮮全南光州慈惠醫院

杉山貞二

●鈴木正孝氏通信

(四十三年卒業。山碓、松原教授宛)

(前略)當地は御承知の如く朝鮮の南端に位し氣候も又非常に温暖にて殆ど九州に比敵すとか降雪も一年二三回少しある位にて積る事等は全く無之候然し海流の爲めか氣候の變化は内地よりも著しき様にて昨日の温暖は今日の冷氣となる事屢々有之候然し目今も御地の四月頃の氣候に候はんか然して當島は火山噴出の遺物とかにて至る處壘々たる岩石にて往來等も之が爲め非常に凸凹有之往診等には人車は勿論無之徒歩致し居り其の靴の破損する事又格別にて候之等の關係が當地にては米作は年々なまざる日本内地に居て聞ける時の如く朝鮮米の安價のものは口に上らずやはり商人の手に高き利をしめられて日本内地と殆ど同價位の米を食し居候然し鮮人は一般に麥

粟等を耕作し之を常食とし米は非常に珍重致し居候故に療患者にて入院米飯を與ふる時の喜悅さも又想像の外に候然し肴は四面海なるだけ非常に安價にて御地の六乃至拾分の一位にて候御地の壹圓位する鯛は拾錢程にて充分購はれ候キツ、カモの如き鳥類も多々有之一羽貳拾錢乃至參拾錢位にて候之等の價格も日本内地人の入込みてより大分高値を示せる由にて以前は尙ほ安價なりし由に候

當地の住民は全島にて鮮人廿万人内地人は七八百人位有之其の鮮人も朝鮮内地の鮮人に比し大分開化せる様にて又一方より申せば狹狹の様に候之れ以前朝鮮の流刑場と示提せられ其の遺族の自然かく導けるものか存じられ候殊に朝鮮内地の婦人の日本男子を見て恐るゝ如きものに比せば當島の婦人の傲慢らしき態度とては日本内地の婦人もハダシの体にて候男子は一般に進取の氣象少く遊惰に耽り居常煙艸を口にし朝鮮大工の如きものにては長き煙管を口にしつゝ鋸を操り居る位にて候日本大工の工程の三分の一か四分の一位しか作業し得ざる様にて其の工賃の安きも又無理ならぬ事か存じられ候餘り話は別途にのみ本職をもちのけにしてはやはり朝鮮大工の如く工賃三分の一となるべきかいて院務につきて御話し申し上げんに當院は開院後餘り日數も經過せぬ爲め患者數も餘り多からず普通患者とて收價に屬する部は目今一日三四十名施療五六十名にて何處までも鮮人に對して恩惠的なるは之の鮮人の收價に屬するものかも日本内地人より徵集するものも半價にて候病氣は内科的疾患尤も多く殊に腸胃の疾患過半を占め奇異なるは腸寄生虫は人間の常在物と思へぬ様にて之等につき既往症を尋れば勿論ありませぬ云ふ位にて候花柳病も又多き様にて特に十五六歳位の少年にして己に之を有せる或は早婚の結果やかく演出せるか普通通診療するにには通譯の手をかりて處理し爲めにあたら時間を空費し之のみ遺憾に存じ居候療患者は診察に際しては空腹の兒の食を求むる如く人情も蕘もあればこそ唯重病らしく云ふて薬を多量に貰はんさせざるものゝ如くにて

候土地の衛生も人智の開化せざるため然るか糞尿も至る處排し家々驢馬又は牛を飼ひて其の排泄物も至る處散亂しやがて夏期となれば蠅の生息する處となり飲食に際し食物の上にとまり氣をつけざれば食と共に口中に入る事屢々この話にて候前述の始末放著任當時は食物も何やう不潔の様に考へられ食ひ難き様なりしが慣れ候へばさのみ苦痛も思はず候(下畧)

朝鮮濟州慈惠醫院

一月二十一日

鈴木正孝

●寺尾敬三氏通信

(四十四年卒業。豊橋病院醫員。十全會宛)

(前畧)十一月二十二日「明日の午後五時半に」ホテルにて同窓會を開くから是非出て呉れ給へ」と云ふ音波が口、電話器耳と云ふ順を逐ふて一幹事から起つて周圍十有餘人の在豊橋十全會員に達した。

四角四面の開會の幕を幹事の我手際、圓く切つて落せば現れ出たる面々は

- | | | | | | |
|-----------|--------|----|---|---|----|
| 愛知縣渥美郡田原町 | 田原病院院長 | 渡 | 孚 | 貞 | 31 |
| 騎兵二十六聯隊附 | 一等軍醫 | 關口 | 通 | 太 | 33 |
| 第十五師團軍醫部員 | 一等軍醫 | 井上 | 隼 | 雄 | 37 |
| 歩兵第六十聯隊附 | 一等軍醫 | 松井 | 源 | 長 | 38 |
| 豊橋市吳服町裏通 | 開業 | 原 | 久 | 雄 | 39 |
| 豊橋市豊橋病院 | | 鈴木 | 留 | 次 | 41 |
| 騎兵第二十五聯隊附 | 二等軍醫 | 才田 | 猶 | 次 | 41 |
| 騎兵第二十六聯隊附 | 三等軍醫 | 寺境 | 壽 | 貞 | 42 |
| 歩兵第六十聯隊附 | 三等軍醫 | 山科 | 他 | 喜 | 43 |
| 歩兵第十八聯隊附 | 三等軍醫 | 竹松 | 常 | 雄 | 43 |
| 輜重兵第十五大隊附 | 三等軍醫 | 坪 | 倉 | 利 | 43 |

工兵第十五大隊附

豊橋市豊橋病院

三等軍醫 米多外男 44

寺尾 敬 34

の雨後ならぬ筈揃ひさてもかしこまつた一杯くつるいだ二杯無禮講の三杯が火箸の様な腕相撲に始まり喉頭梅毒の様な浪花節に至り原君の二本堤さては圖螺の輕妙なる最も好評を博しこゝ興趣をぞろに湧いては談論風發。諸先生方の上は申すに不及思出の翼はかの大手町の古校舍に小立野の病院に四高の分教場にその飛んで速きこゝは飛行機も既足なるべく最後に茶漬の兵糧を胃中に送り浮世敵手の戦闘準備を終へて一同サヨナラでくぐるホテルの門……………十五夜の寒月松頭に高し。

來年の關西醫師大會は金澤にて開催の様聞及び候その節は當病院長を始め開業の先生連中も引張り出し大舉金澤を衝かむこの計畫も有之候か如何に候哉

本月二日より本年度卒業の柳瀬仁三氏豊橋病院醫局の一員となり金澤派中々優勢に候

三河國豊橋病院にて

寺尾 敬 三

● 正木芳隆氏通信

(四十四年卒業。在東京。下平教授宛)

(前畧)先生の御蔭げにより無事御茶を濁し乍ら日暮し致し居り候間他事乍ら御放棄被下度候近頃は別に珍らしき事も面白き事もなく日暮し致し居り候が或は澤山面白き事珍らしき事ありても愚物の爲めに見出す能はざるかも知れ申さず候只金澤と異なるは内務省の試験出のものご醫專出のものごの間に一寸競争らしきものある事にて候之は試験出連は外來或は病室に行きても獨乙語が主なる爲め充分了解し難くと申すご獨乙語が出来るように

(通信)

第十八卷 第三號

八五

第八十六號

三一

聞へ候が誠に御恥かしく目下又ア。ペ。ッ。エ。とやり始めし位ひにて候がテロニカルの事丈は稍了解し得る故に何かご便利にて候が試験出は盛んに獨乙語の研究をなし又譯書によりて大小ごなく頭腦につめ込みて醫專出に肉薄し御蔭様にて小生の如き怠惰者も時折り書物を手にする様に相成り書物に出なごたかる事も無き様に相成り候呵々後時き乍ら感じたるは獨乙語の大切なる事にて先輩諸彦の常に教へられし所なるに百聞は一見にしかずの例への如く自分でつらく残念に感じ始めて三太郎文典に手をつけまるで教へられし事なき書に向ふが如く自分で自分の過ぎこし方を驚ろき申候(下畧)

東京淀橋町柏木三三八

正木 芳 隆

● 宇佐美保久氏通信

(四十四年卒業。東京杏雲堂病院。十全會宛)

謹啓陳者其後は久々御無沙汰に打ち過ぎ欠禮の段恐縮の至りに奉存候(中畧)私事は無事平々凡々にて之れまで秋田縣横手病院に勤務致し居り候處今回深く自分の未熟を悟り之れでは自分で自分を怪しむ位なれば況して社會衆生の濟度なんごは思ひも寄らぬ事と思ひ立ち親ら勵聲叱咤して上京佐々木博士の下に來りて刺戟せられ居り候田舎の病院にては過分の報酬を得らるゝ事なれご之れにては鈍頭更らに大に鑪を生ずるのみなれば甚だなきげなく果敢なく存せられ候

實は前々より申し込み置きし處幸ひ同窓の清水君ありて斡旋せられ御蔭によりて田舎より飛び込みて直ちに醫員に採用せられ何より喜びに候

當院は御承知の如く佐々木東澤先生の經營にかゝるものにて今や基礎鞏固にして老先生には現下は當院に無關係にて閑地に雲煙野鶴を友とて消陽

罷在候て全ては院長佐々木政吉博士の統率に御座候副院長には佐々木隆興博士、佐々木秀士學士、吉光寺博士の三人にて吉光寺博士は歸朝のホヤ
くにて胃腸科專任に候

醫局は山崎學士の醫長の下に吾等各醫專出の醫員七名(母校二人、仙臺三人、岡山一人、慈惠一人)に候其他傍觀生なるものありて醫專出又は試験出及び受験生(女醫生)等十幾人日々來觀致し居り候

本院の組織は萬事研學に都合よく設備せられ聊か得る處あるべく存候目下は又増築中にて本年中に竣工可致筈に候

同窓の清水君は専ら吉光寺先生に屬して種々の Arbeit もありて近々中外醫事新報に發表せらるゝ由にて大に勉勵致居り候

本院は駿河臺なる帝都目抜き場所にて御隣りはニコライ聖堂なれば刻々に其の聖鐘耳朶にひびきて人情紙より薄き都下の生活の且つ又無味なる形的科學を修むる吾等には聊か靈的感興を味なはれ候間幸ひ御安神下され度候

目下に膝下の同窓生(四四年卒業生)私の知る處にては清水、小島、若槻(正木)志村、松尾、宇賀治の諸君に御座候も着京匆匆の事さて未だ拜眉の榮を得ず候餘は後便にて敬白

駿河臺香雲堂病院醫局にて

元湊保久事

宇佐美 保久

● 本正生氏通信

(大正元年卒業。米國渡航。十全會宛)

其 一

拜啓益御多祥奉賀上候今月十九日の日曜日珍らしくも二寸許り降雪あり雪

見なんご騒ぐ奴あり十時頃巢鴨の芦原將軍閣下を訪問すべく電車中の人と相成申候十一時頃病院に行き先日先生より頂きたる紹介狀を差出したる處宿直の齋藤醫員出でられ我等を案内せらる

先づ始めに堅固なる煉瓦造りの方面を見る内に浴湯ありマニー(女)とパラリーゼ(女)の持續浴を見る此方面には目下以上の二人とパラノイヤの三人あるのみ。次で之と同構造の男子室を見る患者二十名ばかり先づ斯の如くにして總入院患者四百四十名計リカタトニー其大半をしめ申候尙標本室、研究室、講義室等も見物致し頗る愉快を感じ申候
御蔭にて大日本第一の巢鴨精神病院を見るを得感謝の至りに不堪候

本 正 生

着京以來都見物にせはしく十三日十時東京着

直に淺草寺に參詣仕り其附近の雜踏の狀に驚入候いつもく田舎の御祭の様存候

十四日、午後四時外出、銀座通り等を散歩、又淺草に至り其夜景の美を賞し候

十五日、午後二時頃早稲田大學に至り其圖書館に入る法律等の書物多きも醫學書に至りては殆んど皆無、又理工科部の種々の機械も見物致し候大隈伯の邸も外側より見申候

十六日、午前十一時、新橋發横濱に向ふ直に旅館に至りて乗船等につき間合致し、海岸に行き其壯大日本一の開港場にして漁船の多きに一驚致し候夫より歸京午後五時海軍々醫學校へ赴き萩原軍醫殿に面會致し軍醫學校内にて一休み夫より同道して銀座の牛屋にて腹一ぱい牛を食ひ、歸宿仕り候十七日雨天、何等のなすなく午後あまりつまらぬ故五錢の活動寫眞を見て日を過し申候

十八日、午後一時頃外出、徒歩にて越中島に至り商船學校へ行き校内參觀船船の構造等を見學致し、又其校側の河につなげる明治の始めつ方御座船

なりし明治丸に登乗致し船内殘る隈なく見物致し陛下の御座所の戸は開かれごせめてはご戸の閉け鍵に手を觸れ申候商船學校の方より佐渡丸運轉手機關長の紹介状を受くること

十九日、萩原兄の御訪問に接し直に巢鴨病院見學仕り候尙東京のあらゆる有名なる病院見學致す心算に候

醫局皆々様には益々御健康御勉學奉賀候小生着京以來御禮狀やら、何やら色々やらればならず多忙の爲つい失禮に打過ぎ平に御大赦相頼申候兎に角東京は見ゆ所も山々有之候が今は大分つかれ申候又此後の模様は御知らせ申すべく候

巢鴨所見

- 一、建物が十九世紀と二十世紀とを混合したる点
- 一、掃除の行届きたる点
- 一、看護婦及び看護人の規律嚴重なること
- 一、面會規則の嚴重なること

一時半頃、病院を辭し春日町迄兩人の田舎者マン／＼と車掌をゴマチーンとして今小生の下宿にて申食一寸一服し此手紙を書く之より春木町の古本屋にて醫書をヒヤカシ然る後上野公園見物今夜は本君と最後の訣別をなすべく小生は來る廿四日頃より七日間程横須賀軍港見學に赴く豫定に有之候本君の山高帽子は中々善く似相ひ鳥打帽の小生は同行の際には三太夫の資格に見ゆることの大評判に有之候

右寄せ書にて近況申上候醫局皆々様時下御自重專一と存候小生は之にて欄筆可仕候

萩原生

萩原生

東京は初めて一日二日中は東西南北殆んど不可解、電車ものれず(自分で)誠に困り入り候ひしが三日目位から氣も丸が大きなりごれにでも乗つてあるき歸宿候は何でもない様になり申候しかし東京を充分に見物する暇もなくして横濱へ行かねばならず廿四日午前九時より身体検査有之爲廿三日中に着濱の豫定致居候

其二

拜啓御地寒氣嚴く雨雪驪にふりしきり由候承り申候醫局御一同様には御障りもなき由承り喜入候、過日來野生義大學病院、高田病院等諸所で病院を見學仕り候、而し差したる發展も認めず、たゞ巢鴨病院はや、精神病院として感じたるのみに御座候、東京にはなか／＼病院が多いが小なるものは見るに足らずと存候、金澤病院は意外にも發展致し居ること今始めて感心致居候慈惠醫院醫專の病院も友の御世話にて一寸入て見學致し候ひしもあまり見れなれば残念に候該校は随分立派らしく思はれ候が其内容はご一か充分に知るを得ず候、廿四日より横濱にて身体検査ある由にて廿三日着濱せしが廿七日より検査となり、直に歸京致し廿六日夜横濱停車場前旅館福井屋に止宿仕り候(昨夜)宿は満員にて、都合あしき爲其支店の中村屋に當分止宿致し居候

本日(二十七日)午前九時より神奈川縣廳に於て身体検査施行せられ合格致し候が、十二指腸虫の検査に合格せぬと乗船致兼候 Not は本日出せしが廿九日に至らざれば發表せられぬ由に候目下合格は疑なしと信じ入候、合格すれば三十日午後二時横濱出帆の豫定に御座候(出帆は一日遅れ)、いよ／＼乗船出來れば又更に御通知申上べく候、シヤトル行の者約五十名有之候、中女子十名計り、移民が34位に御座候、其他は商業視察等の旅券持参仕り候、渡航人員を縣別にすれば山口縣、熊本縣、最多、次で廣島縣次で新潟縣に候石川縣は小生一人に候、ニッポーク行の者二名位其他は殆んど北米及海岸地方へ行くものらしく候、以上はたゞ人の話を聞いて居た

ら多分そうらしく候、こまかなことは乗船後分るる存居候、金澤から東京へきて電車に乗ればごごへ行くやら知らなんだが、次第へ明り行き今では充分に乗れる様になり、大門から淺草雷門迄は一寸のれば眼をふさいごるご行き、宮城へ行かふごすれば大門で乗り銀座尾張町で乗換すればよし、東京にあらゆる公園を見、有名な隅田川江戸川に櫻の花なき木を見候、春は花ご申せごも時節早く候爲め寒氣身に迫まりてチツテルンく致し候、まあ昨夜横濱へ來ました故、乗船出來るごなるごこれで江戸見物も出來ず候、而し今では江戸もあいて來た故、早々渡米致し度ご存候、淺草に活動寫眞を見るご前後五回(其入場料前後二十錢位)輕業一回、見物致し候、東京は物價は高いごなし、而しごごへ行つても食ひ氣に、あせりごても金の入るには閉口仕り候、古本見れば古本が買ひ度い爲め色々買ひ求候爲め着京以來約三十兩の大金は其影だも見ぬ様相成候、又後便申すべく候、時下切に皆々様の祈御健康候勿々頓首

横濱にて

一月二十七日

本 正 生

●周頌聲氏通信 (大正元年卒業。在支那。松原教授宛)

肅啓時下深寒之節に御座候處諸先生御壯健にて御起居被成候哉奉候候袂別以來誠に意外の御無音に打過候へ共心に變りは無之候但し世事多端にて身は瓢蓬の如く定處無之候に付き御起居候致暇もなかりしかば遂に御無沙汰致候扱て小生歸國後山東省中西醫院にて内科部を服役致中湯君に被招練候に付き先月中旬頃に北京醫學專門學校に參候本校は本年十月頃新設せられ一切の事尚ほ順序あらず只今房屋を修繕し器具を購備し生徒を召募しつゝ來年正月開校の準備致居候間甚だ叢忙中に御座候小生暫時組織學課を擔

任し將來内科に轉任致積御座候終りに小生歸國致時三個月分の十全會雜誌注文致有之候向何卒御送り被下度候以上

民國元年十二月二十一日 門生 周 頌 聲 拜

北京醫學專門學校



校内雜報

●陸軍衛生部依託生

左記十四名の諸氏は此度一月三十一日付にて陸軍衛生部依託生を命せられたり。

- | | |
|---------|-------|
| 醫學科第四學年 | 千田 登 |
| 全科第三學年 | 柴田 一男 |
| 全科第二學年 | 中本覺二 |
| | 岡本敬三 |
| | 上原寅太郎 |
| | 森本捨三 |
| | 今井德藏 |
| | 高橋甚一 |
| | 喜多村虎次 |
| | 本多隆元 |
| | 鈴木信友 |
| | 鈴木信友 |
| | 神田與敬 |
| 藥學科第三學年 | 下根信近 |
| 全科第二學年 | |

人事

●須藤憲三氏

新任教授(醫化學)全博士の宿所は左の如し。

Prof. Dr. K. Sudo

bei Frau Kannadt

Wielandstrasse 4, Port. 2 III

Charlottenburg, Berlin, Deutschland.

●石坂伸吉氏

新任教授(生理學)全學士の宿所は左の如し。

Prof. Dr. S. Isehizaka

Bungstrasse 45 I

Göttingen, Deutschland.

●河野 勇氏

全氏は三十三年に本校を卒業して以來其郷里なる福井縣丹生郡吉野村字本保に於て多年實地開業に従事し性來篤學にして殊に「トラホーム」の病原の研究に一身を捧げ終には一種の病原菌なるものを發見し開業の傍ら自ら其培養等の研究に従事し時には遠きを倦まずして金澤の母校に來り吾が十全會の總會に出席して全氏自ら發見せる「トラホーム」病原菌に就て淳々講演して其所説を公にせられたることありしに未だ其研究が學界一般の承認を得るに至らずして昨年十二月二十四日より無情なる病寃に襲はれ本年一月五日。世人は新年の屠蘇に酔ふの時終に逝去せられたり。

●武長壽雄氏

全氏(四十三年度卒業)は昨年春まで東京の日本赤十字社病院に研究中なりしが此度福井縣三方郡佐柿の郷里に歸り自宅開業

を初められたり

●鈴木正孝氏

全氏(四十三年度卒業)は豫て秋田縣米内譯町の病院に在勤中なりしが此度壯圖を抱きて朝鮮の濟州島に航し全地の慈惠醫院に奉職せらるることとなり深く全氏の自愛を祈る。

●太田尙男氏

全氏(四十三年度卒業)は當金澤病院外科一部醫員として下平博士の下に研究に従ひ後ち出て、兵庫縣水上郡柏原町の柏原病院に轉任せられしが頃日は全院を辭して越中高岡市の流行醫吉崎郡太郎氏の留守中の代理として全地に越き活動中なり。

●辻本辰之助氏

全氏(三十三年度卒業)は永年能登七尾町にありて獨力にて私立神明病院を經營し眼科專門にて開業中なりしが一昨四十四年八月獨逸に航しゲツチンゲン大學に止りて眼科を専攻して大に得る所あり昨年十一月論文を提出し試験に合格して目出度「ドクトル」の學位を得昨年十二月より伯林に轉學して更に各地の大學を訪問し今や錦を着て去二月中旬に歸朝せられたり。

●瓜生尹重氏

全氏(三十四年卒業)は此度鳥飼尹重と改姓せられ尙ほ舊住地たる福井縣武生町にて開業中なり。

●杉山貞二氏

全氏(四十二年度卒業)は卒業後東京回生堂病院に奉職し後愛知縣知多郡半田町に開業中なりしが此度朝鮮全羅南道光州慈惠醫院に奉職せらるることとなり主として全地附近を巡廻して診療施藥に従事中心なりと云ふ吾人は全氏の壯志に感じ其自愛を祈ること切なり。

●加瀬順之助氏

全氏(四十四年度卒業)は卒業後當金澤病院内科二部の研究生として止まり後ち福井市の河野病院に奉職中なりしが此度前記太田尙男氏の後任として全柏原病院に轉任せられたり。

●田中信一氏

全氏(四十四年度卒業)は卒業後福井縣敦賀郡立病院に在職し全院長北川健三氏(三十一年度卒業)の下に渡邊八之進氏(四十四年度卒業)と共に在勤中なりしが此度全病院を辭して其郷里たる石川

縣能美郡國府村字植田に開業せられたり。

●新 八郎氏

全氏(四十四年度卒業)は卒業以來東京に上り駿河台の濱田病院に醫員となり濱田博士の下に産婦人科を専攻中なりしが此度郷里なる埼玉縣大里郡本郷村大字本郷に於て開業せられたり。

●田村 實氏

全氏(四十四年度卒業)は卒業後加賀國大聖寺町にありて開業中なりしが此度一年志願兵として當金澤市歩兵第七聯隊へ入隊せられたり。

●小西眞清氏

全氏(四十四年度卒業)は卒業後當金澤病院の神經科に止りて研究し次て其郷里たる富山市に歸り全地の小兒科の流行醫たる高田範園氏(三十三年度卒業)方に勤務し傍ら自宅開業中なりしが此度一年志願兵として當金澤市歩兵第七聯隊第十二中隊へ入隊せられたり。

●豊田 銳氏

全氏(四十四年度卒業)は卒業後富山縣射水郡水戸田村にありて此度卒業せる沖爲次郎氏方に止り開業中なりしが此度前記小西眞清氏に代りて富山市に轉じ小西氏宅にありて開業の傍ら高田範園氏を輔けつゝあり。

●植西武彦氏

全氏(四十四年度卒業)は卒業後京都醫科大學内科にありて中西博士の下に専心研究中なりしが此度京都府相樂郡山莊村の郷里に開業せられたり。

●轉 居 會 員

福井縣南條郡武生町蓬萊廿二(舊姓瓜生)

盛岡衛戍病院

三重縣度會郡吉津村

舞鶴海軍病院附

大阪府西成郡勝間村字玉出

鳥飼 尹 重 (四)

藤 浪 謙 (五)

尾崎 平 吉 (六)

小出貞次郎 (三)

橋内 兵 治 (全)

靜岡市追手町八

舞鶴軍港軍艦千早

大阪砲兵工廠醫務掛(二等軍醫)

大阪市西區松島一丁目番外三十三

横須賀海軍砲術學校附(中軍醫)

和歌山縣西牟婁郡田邊町字上屋敷三十二

朝鮮全羅南道光州慈惠醫院

長野縣長野市石堂町乙三〇

埼玉縣大里郡明石村

長野市狐池四十二

福井縣三方郡佐柿

朝鮮濟州島慈惠醫院

富山縣高岡市 町吉崎郡太郎方

清國安東縣安東病院

石川縣能美郡國府村字植田

新潟縣中頸城郡柿崎村平野泰吾方

大阪市天王寺筆ヶ崎町五五二番十五號

埼玉縣大里郡本郷村大字本郷

富山縣下新川郡魚津町大字新町濱多方

大阪府西成郡傳法町北四丁目百二十六

舞鶴軍港軍艦千歳(少軍醫)

金澤市早道町三十五

金澤市工兵第九大隊醫務室

兵庫縣水上郡柏原町柏原病院

東京築地海軍々醫學校乙種學生(少軍醫)

富山縣高岡市河合病院

加藤 敏 作 (四)

小野 醇 吉 (全)

山 川 寛 三 (全)

岡 勝 重 (四)

荻野茂次郎 (全)

吉田 文 平 (全)

杉 山 貞 二 (四)

田 中 精 一 (全)

齋藤 友 一 (全)

磯 貝 一 資 (四)

武 長 壽 雄 (全)

鈴 木 正 孝 (全)

太 田 尙 男 (全)

馬 場 庄 江 (全)

田 中 信 一 (四)

佐 藤 進 (全)

勝 木 千 尋 (全)

新 八 郎 (全)

加 藤 大 (全)

石 川 元 良 (全)

小 俣 幹 翁 (全)

田 村 實 (全)

國 田 武 雄 (全)

加 瀬 順 之 助 (全)

萩 原 忠 (全)

齋 藤 金 則 (大元)

三重縣四日市市沖ノ島 津田病院
 金澤市弓ノ町十
 新潟市若杉病院

●居所不明會員

御存知の諸君は御手数ながら本會雜誌部へ御一報下され度願上候
 但し姓名の上に●印あるは最近に不明となりたる會員なり

舊住所

東京市芝養生園
 大阪市東區京橋三丁目
 石川縣能美郡小松町字京町
 朝鮮京城旭町二丁目
 東京陸軍々醫學校
 長野縣小縣郡九千村
 臺南衛戍病院
 朝鮮大邱同仁病院
 近衛工兵大隊(軍醫)
 近衛歩兵第一聯隊附
 朝鮮歩兵第四聯隊附
 臺灣臺中醫院官舎
 工兵第九大隊
 兵庫縣神戸病院
 門司市西川端町二丁目
 獨乙國ミューンヘン市
 高知縣高岡郡須崎古市町

駒田作之進(大正)
 鳥居環(全)
 五十嵐齋(全)

園崎純次郎(二全)
 森岡惣太郎(全)
 松村四郎(三全)
 富久尾溪(全)
 江藤潤一(全)
 下村義二郎(全)
 後藤義賢(全)
 西尾岱抱(全)
 窪美一久(三全)
 並河權六(全)
 水上俊三(全)
 神岡藤一郎(全)
 西村順八(三全)
 本城熊三郎(全)
 戸井源吾(全)
 松久祐馬(全)
 藤井茂(全)

近衛野砲兵聯隊
 新潟縣中頸城郡新井町
 兵庫縣柏原病院
 栃木縣那須郡湯津上村佐良土
 廣島縣高田郡吉田町
 京都市上京區新築屋町通
 京都府綴喜郡有智郷村字内里
 福井縣立病院
 札幌北一條四十七丁目
 東京芝神谷町
 静岡縣駿東郡沼津町大字新町四〇四
 山口縣美禰郡赤江村宮原病院
 朝鮮駐劄軍司令部附江原道原州守備隊
 東京市神田區駿河臺井上眼科病院
 朝鮮江原道春川守備隊附
 佐渡國羽茂村羽茂本郷
 房州北條町北條病院
 大阪市北區絹笠町同生病院
 京都上京區笹屋町二ノ一一六六

●中野鑄太郎氏論文正誤

計測方法ノ終リ括弧内ノ以上示ス處ノ云々トアルヲ左ノ如ク改ム
 (部位名稱等ノ譯名ハ多ク鈴木博士著「人類」及ヒ「解剖學名彙」ニ據ル)
 各部位ノ成蹟及ヒ其比較ノ項ヲ左ノ如ク改ム
 計測標本ノ成蹟ヲ今各部位ニ區別シ(自第三表至第二七表)標本箇々ヨリ得

木下節三(三全)
 鈴木政治郎(全)
 吉武安男(全)
 池谷運平(三全)
 瀧澤武藏(全)
 内田貞春(全)
 水口順(全)
 五井康平(全)
 楠正之(全)
 松本文二(全)
 山中房次郎(全)
 梶川甚一(四全)
 中谷内義雅(全)
 河崎正雄(全)
 奥山正雄(全)
 勝部方策(三全)
 山岸缶(全)
 三上儉次(四全)
 ●武田良海(大元)

タル高徑等ノ最小數乃至最大數ヲ各階級ニ順次配列シ其レニ應スル處ノ頭蓋數及ヒ計測頭蓋數並ニ其平均數ヲ舉示シ終リニ比較ノ大要ヲ述ベシ
 (幼者ノモノヲ混シ計算シアルモ幼者必ス小ナルニアラス且ツ標本モ僅少ナルガ故ニ其儘トナセリ)
 計測標本全体ノ成蹟ハ紙面ノ都合ニヨリ此レヲ省略セリ(原表ハ本校解剖學教室ニ保存ス)

會 告

今回集金郵便ヲ以テ二月十七日迄ニ領收ヲ了セシモノ左記ノ通りニ有之候間曩ニ差出置候領收書ト御照合ノ上相違ノ点有之候ハ直ニ其旨御一報相煩度尙既ニ御出金ノ分ニシテ郵便局ニ於テ集金委託書番號書キ違ヒ等ニシテ目下再調方照會中ノ爲メ未納ト相成居候向モ有之候間爲念廣告置候也

大正二年三月一日

會 務 書 記

●自大正二年一月二十二日校外特別會員會費調書
 至全 年二月十七日

金額	期限	氏名
金參圓	自大正元年度 至大正三年度	丸谷定雄君
金參圓	全	伊藤芳廣君
金參圓	全	川村二郎君
金壹圓	全	伊坂春君

(紙面ノ都合ニヨリ以下次出)

金貳圓	自大正元年度 至大正二年度	木谷義三郎君
金貳圓	自明治四十一年度 至明治四十二年度	仙波昌秋君
金參圓	自大正元年度 至大正三年度	井上又吉君
金壹圓	明治四十四年度 一ヶ年分	中田徳次郎君
金參圓	自明治四十二年度 至明治四十四年度	手塚甚之助君
金貳圓	自明治四十三年度 至明治四十四年度	大澤誠一君
金貳圓	全	森正英君
金參圓	自大正元年度 至大正三年度	戸澤和一君
金壹圓	大正元年度 一ヶ年分	小西俊三君
金壹圓	全	河合鷹君
金貳圓	自明治四十四年度 至大正元年度	津川恒君
金貳圓	全	大屋保治君
金貳圓	全	田上清貞君
金貳圓	全	大橋豐君
金五圓	自明治四十一年度 至大正元年度	近郷重孝君
金貳圓	自明治四十四年度 至大正元年度	大木則雄君
金壹圓	大正元年度 一ヶ年分	木下克雄君
金貳圓	自明治四十四年度 至大正元年度	尾倉一英君
金貳圓	全	林正雄君
金九圓	自明治三十七年度 至大正元年度	林義輔君
金貳圓	自明治四十四年度 至大正元年度	加納景成君